カオス・クロニクル

岡村　としあき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カオス・クロニクル

【Ｎコード】

Ｎ３１４０Ｚ

【作者名】

岡村　としあき

【あらすじ】

ＭＭＯの黎明期はとうに過ぎ、数々のタイトルがサービスを終了してきた。サーバー統合。つぎはぎだらけのアップデート。放置されたバグ。このカオス・クロニクルもまた、混乱の時代にあった。サービス終了目前と囁かれるＭＭＯで、一人のベテランプレイヤーと一人の初心者プレイヤーが出会う。

＊ＭＭＯの特性上、チャット内の会話を表現するため、文中には顔文字を使用しています。横書きでお読みいただくことを推奨します。

押し切れなかったＥｎｔｅｒ

一瞬の迷いが命取りになる。たった一度のミスが原因で全てが台無しだ。そうならないように、ただただ最善を尽くす。

秀麗な鎧を着込んだ金髪の若い男や、下着同然の派手なローブを着込んだ銀髪の若い女、２メートル近い体躯をした緑色の肌の大男。彼らの命を守ることが、ここでのオレの役目。

目の前で火花が散る。薄暗い洞窟の中で、戦いが始まった。ロックアントと呼ばれるモンスターの討伐……それが今回の仕事だ。

近隣の村人を襲う悩みのタネで、これを数体討伐すれば、村長からたんまりお礼がもらえるというわけだ。

アントの巣と呼ばれる洞窟は、入り口が人一人入るのがやっとだった。中に入ると中は迷路のように入り組んでいて、一度はぐれると死体で再会……なんてことになりかねない。

今回組んだのはオレを含め４人だ。鎧の若い男が、シュレン。エロいねーちゃんがマリアベル。大男がパックン。そしてオレ……エルト。

入り組んだ迷路を進むこと数分。大きな空間に出た。その直後だ。所々の穴という穴からアント……バケモノアリが湧いてくる。

シュレンが切り込む。盾を持つ左半身を前に出し、右手の剣で襲い掛かってきたアリの前足を切り落とし、そこに畳み掛けてきた別のアリの攻撃を左の盾でガードする。

しかし、次の瞬間そのアリは自分の頭を失っていた。パックンが左右の手に握った鉄のハンマーで背後から飛び掛り、頭を叩き潰したのだ。返り血にも似た粘液を顔に受け、パックンは笑う。シュレンのほうも、鎧を緑色の何かで汚していた。

横穴から沸いて出たアリに、マリアベルが火属性の中級魔法『ブレイズアロー』の詠唱を始める。マリアベルの足元に六芒星の魔方陣が発現し、彼女の掌からバスケットボールほどの大きさの火炎球が3つ放たれ、アリを焼き尽くす。

耳障りな『ギギギ』という音を立ててアリは灰となって大地に還る。

今日初めて組んだ彼らだが、チームワークは即席にしても、うまくまとまっていた。

「3匹来た！　スリを頼む」

「わかった」

オレの出番らしい。オレには彼らの様に、強固な盾も無ければ、一撃必殺の技もないし、圧倒的な火力を持っているわけでもない。やれることはただ一つだ。

彼らのサポート。

対象の意識を数秒間奪うことのできる催眠魔法『スリープ』の魔法を使う。オレの足元にもマリアベルと同様の六芒星の魔方陣が発現する。

白い霧がアリ共を包み込み、意識を奪うことに成功。その間にシュレンの体力を回復するべく治癒魔法『ヒールライト』を唱える。

シュレンの体は白い光の柱に包まれ、傷付き、血がにじんでいた皮膚が即座に修復された。

「よし、あと一息で目標数達成だ」

このチームのリーダーである、シュレンの掛け声で士気があがった。パックンもマリアベルも、やる気をたぎらせている。オレはそれを後ろから冷静な目で観察していた。

ヒーラーであるオレまで熱くなるわけにはいかない。状況の変化を見極め、敵との適切な距離を保ちつつ、味方に絶妙なタイミングでアシストを入れる。生命線であるオレが無闇に前に出るわけにはいかない。

それがヒーラーだ。

シュレン達の活躍もあり、程なくして予定数の討伐が終わった。

討伐が終わったオレ達は、村に帰還すべくオレを中心に集まった。帰還魔法『リターン』を発動させる。発動と同時、一瞬視界が暗転し、景色がのどかな山村の風景へと様変わりした。

「おつかれ～、またよろ～＾＾」

「おつですー」

「おちゅ＜＜」

オレ以外のメンバーはそういい残し、パーティーを解散すると、村長の家へと報酬……クエストアイテムとお金を受け取りに行った。

『またよろしく』。ディスプレイにそう表示された文字。あとはエンターキーを押すだけ。たったそれだけの事を、一瞬躊躇(ためら)った。

夕闇が空を支配しつつある午後5時。窓辺にまで闇の魔の手が伸び、室内は真っ黒だ。

学習机の上に設置したノートパソコンのディスプレイ……。そこには、青い髪の少年が映し出されている。

先ほどまで、動かしていたキャラクター……エルト。

エルトはまるで、プレイヤーと同じ様に面白くなさそうな顔をして、鋭い視線で空を見つめていた。そういう顔に設定したのは自分だが。

しばらくエルトと同じ様に天井を見上げる。そして、キーボードを6回叩いた。

メッセージウィンドウには何も表示されていない。ＢａｃｋＳｐａｃｅで消したからだ。

もう誰とも関わりたくない。彼らともこれっきりだ。ソロのほうが気が楽でいいし、時間に縛られずに済む。

足を引っ張るのも嫌だし、引っ張られるのはもっと嫌だ。

一匹狼でいい。

再び視線を天井に向け、イスの背もたれに全体重を預けると、大きく伸びをする。

席を立ち、パソコンの電源を入れっぱなしにしたまま、自室から出ると下の階へと降りていった。

まるで……ゲームからも逃げているみたいでなんだか嫌な気分になった。

出会いとターニングポイントなネタ師の初心者

カオスクロニクル。純国産ＭＭＯである。サービス開始から８年……日本のＭＭＯの黎明期を生き続けたゲームだ。

美麗なグラフィックと６つの種族と８つの職業。プレイヤー同士が戦うＰＶＰシステム。

当時のＭＭＯ業界に新風を巻き起こし、最盛期はサーバーが混雑しすぎて臨時サーバーメンテナンスが週に２，３度あった。

それから７年経った今は……サーバーも統合され最盛期の見る影もない。それまで月額制だった課金システムも、基本無料になり、プレイヤーの数は一時的に増えた。

育成も大幅に楽になり、新規プレイヤーが増加したのだが、それも一時のこと。無料になった事で、低年齢層のプレイヤーも増加した。

彼らの中にはモラルに欠ける者も少なくなかった。それが古参プレイヤーとの軋轢を生むのにそう時間はかからなかった。

現金でゲーム内通貨を購入するリアルマネートレード……ＲＭＴや、ゲーム内のキャラをプレイヤーの変わりに育成する、育成代行が蔓延(はびこ)り、それに手を染める新規プレイヤーも後を絶たない。

そんな新規プレイヤー達がいわゆる『害プレイヤー』になって、面白半分にＰＶＰを初心者や低レベルプレイヤーにしかけ、低レベル帯の狩り場は一時、害と古参プレイヤーの死体が転がる戦場とな

った。

それから1年。害プレイヤーの多くは飽きてしまったのか、姿を見せる事はなくなり狩り場は以前の姿を取り戻した。

ＭＯＢだけのフィールド。静か過ぎるダンジョン。入場制限無しにいつでも入れるインスタントダンジョン。

それが、元の平和なカオス・クロニクルの姿だ。

ゲームに戻ってきたオレは、空を見上げながらふと思い出していた。ＣＧで描かれた青空には雲の塊がゆっくりと現実世界さながらのように流れている。

時刻は午後９時。外は真っ暗だが、カオス・クロニクルの世界では昼間だ。日曜の夜。普通ならば、回線が込み合ってラグが多くなる時間帯なのだが、依然快適である。

パーティーマッチの画面を開く。まばらだが、いくつかパーティーメンバーを募集しているパーティーがあるらしい。ご苦労なことだ。

とりわけ、ヒーラーが不足しているのか、ヒラ様募集中のコメントがよく目に付く。すると、案の定だ。

「”どもっすー。今ヒマしてません？　よかったら悪魔の森にでも行きませんか??”」

「”どうも。他のパーティーに誘われちゃったんでまた今度お願いします”」

「”りょーかーい＾＾”」

ご苦労な連中からたくさんのウィス……プレイヤー間同士で会話するウィスパーモードでラブコールが飛んでくる。そのすべてを同じ理由で断って、うんざりしながらパーティーマッチ画面を閉じた。

興味本位で開くべきじゃなかったな。

インベントリを開いて、所持品の確認をする。すると、ＭＰポーションが切れていたので買出しにいくことにした。念の為、自分の倉庫を覗いてみたがストックがなかった。

シュレン達とクエを受けた村『オルティアの村』を出て、街道を一人行く。川沿いの道を歩いて、草原を走る。ここまでの道のりで、他のプレイヤーとすれ違う事はなかった。

当然か。いまさらこんな死に掛けのゲーム……新規で一から始める物好きはまずいない。この当たりは低レベル帯ゾーンだから、プレイヤーよりもＮＰＣの数が多いんだろう。

……快適だな。そう考えていると小高い丘の上に出て、目的地が見えてきた。

『ハリの村』……通称、初心者村だ。カオス・クロニクルを始めたプレイヤーはこの村からスタートする。

基本的なチュートリアルを兼ねたクエストを受け、レベル１５程度で外の世界にようやく繰り出せるわけだ。

ハリの村は、基本的にすべての物品が低価格だ。初心者が買いやすいように値段が設定されていて、他の村に比べ2割ほど安い。

オレは、消耗品は週に一度ここに買いに来て、倉庫にぶち込んでおくようにしている。他にも何か切らしている物はあったかな？とそう考えていたときだ。

珍しい。村の前で、ラグが起こった。

ラグの原因は目の前……それを見てオレは声をあげそうになった。

恐ろしい数のＭＯＢが渦巻いていた。５０くらいだろうか？　それらが村から少し離れた平原でぐるぐると竜巻のようにうねっている。

大量に集めて範囲スキルをブチ込むまとめ狩りだろうか？　それとも、初心者を対象にしたＭＰＫ？

どちらにせよ、関わるつもりは無い。無視して村の入り口に立った時。ＭＯＢの渦が突然散らばりだした。どうやら、渦中のプレイヤーは戦闘不能になったらしい。

いったいどこのアホだと思って、そこに近づいた。

珍しい。素直にそう思う。そして、納得した。

カオス・クロニクルには、６つの種族が存在する。ヒューマン。エルフ。ダークエルフ。ドワーフ。オーク。フェイブ。

ヒューマンや、エルフなどは他のＭＭＯでも良く見かける種族だ

が、カオス・クロニクルにはオリジナルの種族が一つある。

それが、フェイブ。

フェイブは、古代人が神と戦う為に作り出した人造人間（ホムンクルス）だ。ヒューマンの遺伝子を元に、エルフのビジュアル。ダークエルフの魔力。オークの力。ドワーフの器用さ。

それらを兼ね備えた戦う道具として、愚かな古代人が神様ごっこの果てに生み出した最終兵器の一つである。

白く美しい肌に、流れるような銀髪。宝石よりも美しく輝き、闇の中で不気味に光る赤い瞳。

ヒューマンの手足として、死すらも恐れない殺戮人形。ここまで語ればこの種族は最強なんじゃないか、とか考えてしまうが唯一にして最大の弱点がある。

寿命だ。所詮は古代人の神様ごっこ。凄まじいまでの戦闘力を持ち、死すらもおそれない彼らだが、その寿命はたったの２０年。

というのが歴史的な設定で、ゲーム的な設定はというと防御が紙なのだ。

高い攻撃力、高い魔力、底を見せないＭＰ。そして、あってもなくても同じ０に等しい防御力と、一撃食らえば即死レベルのＨＰ。

６回目くらいのアップデートで追加された種族で、追加当時はチート性能で右を見ても左を見てもフェイブ、フェイブ、フェイブ。

そして次のアップでネタに早変わり。今も、野良のパーティーでフェイブを使って紛れ込むと、即追い出される。

ネタ師か、初心者か、よっぱどの熟練者でなければ使いこなすのは難しい。そう。

オレの目の前で倒れているのは、フェイブの少女だった。

「おい、大丈夫か？」

蘇生魔法くらいはかけてやろう。久しくお目にかかっていないフェイブだ。

案外、大量にＭＯＢを引いたのも何かのネタだったのかもしれないな。

しかし、３０秒立っても、１分立っても返事は無い。離席しているのかもしれない。そう思って、その場を離れかけたときだ。

「おんがいｓｍすっすしゅ」

「はあ？」

意味の分からない、初めて耳にする……いいや、初めて目にした言語だった。ＳＭとか言ってるからやっぱネタ師か、こいつ。

「おねがいします」

どうやら、単なる打ち間違えだったらしい。

スキルアイコンから、蘇生魔法『リザレクション』を選び、フェイブの少女を蘇生する。

光の羽が上空から舞い降りて、少女は起き上がった。

それが、オレとこいつの出会いで、ターニングポイントだった。

フェイブナイト

「助かりましたぁ＾＾ｗ」

フェイブの少女は立ち上がるやいなや、ソーシャル『喜ぶ』を使って、子供のようにきゃっきゃっと飛び回った。

キャラクターの真上に表示されている名前を見る。……ｐｕｎｐｕｎ３２１という名前だ。なんだこりゃ？　プンプンさんにーいち？　マジでキレる３秒前とかいう意味か？

「ｐｕｎｐｕｎ３２１で～す＾＾ｖ　プンって読んでくださいね～☆」

プンはそういうと一人で拍手したり、一人で泣いたり、一人で笑い始めた。もちろん、これもソーシャルによるものだが。『褒める』、『悲哀』、『笑い』を使ったんだろう。

「いや、驚いたよ。まさかフェイブのネタ師がまだ全滅してなかっただなんて」

「プンはネタ師じゃありませんよお～；；　頑張ってレベルを上げていたのです！　そしたら、まわりのモンスターさんがいっぱい寄ってきちゃって……」

どうやら、無闇にＭＯＢの群れに突っ込んだ挙句、大量にリンクさせてしまったらしい。初心者によくありがちなミスだ。

「でも、助かりましたあ！　蘇生ありがとです＾ー＾ゝ」

プンは再び、ソーシャル『踊る』で一回転してみせる。プンのシルバーの長い髪とワンピースの裾が優雅になびいて、銀色の妖精が草原に舞い降りたかのように錯覚する。

女フェイブはビジュアル面だけでいえば、女性キャラの中でもっとも人気が高い。

特に、カオス・クロニクルの女性キャラクターの装備は、露出が多く、ローブ系の装備などは下がミニスカートになっていて、スキルを使う瞬間カメラの角度を変えれば……見える。

女フェイブはエルフ並みの美しさを持ちながら、出ているとこはけっこう出ているのだ。

プンが装備しているのは、クエストでもらえる報酬アイテムの、グレードがかなり低いローブなのだが、白いワンピースのようになっていて、丈が膝上２０ＣＭくらいしかない。

それを纏ったプンが、さっきからやたらとオレの目の前で乱舞している。その度、危うい角度で聖域がこの不浄なる世界にさらされているのだが……後で注意してやるか。

とりあえず、このまま去ってしまってもよかったのだが、いくつか忠告でもしといてやる事にする。また村の前でラグ起こっても嫌だし、何度も『蘇生してください』なんて、ウィスが来たら鬱陶(うっとう)しい。

「オレはエルト。レベル４４のビショップ……ヒーラーだ」

「プンはレベル１２のフェイブナイトです！　よろしくね、エルくん＾＾！」

ナイト……フェイブナイト……レアだ。とりわけ紙装甲のフェイブに一番ミスマッチな職業の組み合わせ。

敵の攻撃を一手に引き受けるナイトは、パーティー狩りではとても重要な職だ。ヘイトスキルを使って、敵のターゲットを自身に集中させれば、ヒーラーにとってもＨＰ管理がしやすい。

高い防御力と、敵のターゲットを自身に向けさせるスキル。パーティーでは文字通り盾であり、壁なのだ。

それ故、どこのパーティーも必死にナイトを勧誘しようとするのだが、いかんせん数が少ない。敵のターゲットを集めるという事は、それだけ死亡率が高いということでもあるからだ。

カオス・クロニクルでは死亡すると経験値が減少する。それも、２０分くらい狩りをしてようやく取り戻せるくらいの量だ。パーティープレイには困らないが、それ以上にリスクが大きいので敬遠されがちな職業である。

それに……フェイブナイトは不遇職かつ、不人気職のナンバーワンで、ナイト募集のパーティーでも、『それならローブを来たヒーラーのほうがマシ』だなんて、冷たく言われてしまう。

レベルが６０になれば神スキルと呼ばれる『ヴァンガード』が使用できるのだが……そこまでマゾな奴はそうそういない。

こいつは、何でこんなマゾいのを選んだだろう……ふとプンを見

ると、いつの間にかＭＯＢの群れに突っ込んで、仲良く鬼ごっこに励んでいた。

しかも、さっきよりも数が多い。……あいつ、絶対何も考えずに外見と名前だけで選んだな。

「いや～～～～～～＞＜　助けて、エルくん；；」

チャットとキャラの操作が同時に出来ないらしい。急に立ち止まったプンはボコスカＭＯＢに殴られて、悲鳴を上げて倒れた。その１０秒後にさっきのセリフが流れたわけだが……。

それにしても……誰もこいつと組もうとは思わないだろうな。初心者で、不遇職で、プレイヤースキルもないし、何も考えてない、チャットも遅い。……オレもこれ以上関わるのはよそう。

初心者に関わるとロクな事がないのは、オレ自身がよく知っているはずだ。それは一年前、嫌と言うほど思い知っただろう？

クソ……思い出すだけで……腹が立つ。

「プン。お前、ギルドは？」

リザレクションをかけ、再び蘇ったプンにそう問いかける。

プンはまた一回転して、ワンピースの裾を危うく舞わせると、おもむろに派手な紋章の入ったマントを装備して、こちらに振り向いた。

「入ってるよー＾＾　これがプンの所属しているギルド『灰色の狼』

のギルドマントなのだ＞＜　どうだ、マイッタか@@w」

背中をこちらに向けて、プンはそう言った。

その小さな背中にくっ付いているマントの紋章を見て……マウスを握る人差し指が……一瞬停止する。

ギルドに加入したプレイヤーには、無償でギルドエンブレムが入ったマントが支給される。

プンの背中には猛々しい狼の顔がドット絵で描かれていた。

「お前……『灰色の狼』のメンバーなのか」

灰色の狼はオレがプレイするサーバーで最大手のギルドだ。ギルドメンバーは常に１００人以上いて、エリアボス討伐を独占していたり、各職業ナンバーワンを決める『トーナメント』にその名を多く刻んでいる。

ギルメンは廃人ニート共がほとんだ。さっき組んだパックンも『灰色の狼』のギルメンだった。

「プン、それならギルメンに声掛けて育成手伝ってもらえよ。こんな所でソロなんかしてないでさ。手伝ってもらったほうがすぐに転職もできるぞ？」

後はギルメンさんに任せよう。元々、こいつに興味があったわけでもないし、そもそもオレは、初心者支援の優しいベテランプレイヤーなんかじゃない。

だが、プンはすぐに返事を返さない。

「……」

わざわざ沈黙をチャットにして表して、先をもったいぶってみせる。何が言いたいんだ、お前は？

キーボードの上に載せたＦキーとＪキーの上で、軽く指を動かし、苛立ちながら辛抱強く待つ。

「；；；」

数秒間を置いて、プンが喋りだした。

「皆、忙しいから無理って言われた＞＜；　ギルメンなのに助けてくれないよーどうしよう、エルくん；；；」

どうやら、ギルメンにも煙たがられているらしい。大手のギルドなんて、そんなものだ。勧誘するだけしといて、あとは放置。

あとは各自、自由にギルメンと仲良くやってくださいねー。とか言ってほっとかれる。周りにすぐに溶け込めるようならいいが、そうでなければ孤立してギルドに居場所は無い。

孤独なのだ……プンは。

狩り場に行っても誰もいないから、同じレベル帯の友人もできないし、ギルドでは初心者扱いされて、半分バカにされているんだろう。

かわいそうと言えばかわいそうだが……。ボランティアで友達ごっこなんてオレはごめんだ。

「ねえ、エルくん？」

プンがオレに疑問形で何かを問いかける。解っている。その先の言葉は。オレに超能力はないが、その先の言葉は解る。

だから。

その言葉が出る前に。

プンよりも早くキーボードを叩いて。

その言葉を紡ぎ出す。

「一人でも大丈夫な狩り場、教えて！　プンがんばって狩りうまくなるから＾＾」

オレの言葉よりも早く、プンがオレの予想を裏切る言葉を紡いだ。

それでも、オレの心は変わらない。

すでにメッセージウィンドウには文字の羅列がセリフとなって、Ｅｎｔｅｒを押されるのを今か今かと待っている。

キーボードを操作して、オレはオレの意思をプンに伝える。

『彼女に送るプレゼント』

「ありがとうございましたあ」

能天気そうなセリフを背中に受けて、村の道具屋から一歩外にでる。

道具屋の看板娘ホリーちゃんは、村一番の美人らしい。そう何度も村の警備員マーシーが独り言を繰り返しているので、これはプレイヤーの間でも有名な話だ。

クエスト『彼女に送るプレゼント』は、１４レベルで一回だけこのストーカー警備員から受けれるが、その報酬が経験値と装備のセットなのでこれをやらない手はない。

内容も、一匹だけクエストモンスターを狩るだけでお手軽だ。

道具屋を一人出たオレは、倉庫に向かった。倉庫番のドワーフに話しかけ、消耗品をたくさんブチ込んでおく。

隙間なく押し込められたポーション類に、癒される。やっぱり、物がぐちゃぐちゃしている方がなんだか落ち着く。ちなみにオレは掃除が苦手だ。

今も部屋の床には色々物がちらばっている。両親がそれを見るたび溜め息をついて『片付けろ』とうるさい。余計なお世話だ。

いや、そんな事は今はどうでもいい。問題は別にある。

倉庫を後にして、村の塀にそって外に向かう。見えて来た。

ストーカー警備員マーシーが今もうつむいて、『ああ、ホリーちゃん……』とか、『今どうしてるんだろう、ホリーちゃん……』と、ホリーちゃんへの思いを募らせている。

そのマーシーの前に、軽量の鎧に身を包み、剣と盾を持った銀髪の小柄なフェイブの少女がいた。

「クエ、ちゃんと終わったか？」

「うん、エルくんのおかげだよ！　ありがとう＞＿＜」

プンがオレに近寄ってきて、飛び跳ねる。子犬のような奴だ。

「レベルも１５になったから、違う村に行けるね、やったー＾＾ｖ」

「そうか、１５になったか。じゃあ、『ミロンの村』に行こう。うまいクエをいくつか知ってる」

「ほんと@@　お世話になります、師匠ｍ（＿＿）ｍペコリ」

ようやくナイトらしくなったプン（装備だけだが）を背中に、ハリの村を出る。

目指す先は、ミロンの村……近くにゴブリン前線基地という、少し難度が高めの狩り場がある。そこでこいつのレベルを上げる。

「プン。ちょこまか動き回るな。アクティブモンスターを引っ掛けるぞ」

「ひゃあ、助けて@@！」

言う前にすでにプンは何匹かのウェアウルフと戯れていた。本当に世話の焼けるお姫様だ。

それら全てを杖で叩きのめし、静かにさせた。

「うわあ、エルくん強い！」

「いや……いくらオレがヒーラーとはいえ、レベル1のウェアウルフを倒すのは、高校生が幼稚園児に電気あんまをかけるような物だ」

小学生の時、二つ年下の弟にかけて泣かしてしまった事があったな、そういえば。

「電気あんま　（？＿？）」

プンが頭を疑問符でいっぱいにしている。

「なにそれ、楽しいの？　プンにもやってみて、エルくん＾＾」

「ぐぐってみろ。その上でやってほしいというなら、オレの奥義を見せてやろう」

「うわあーーい＾＾」

プンは嬉しそうにはしゃぎながら街道をかけていった。……数引きのウェアウルフを引き連れて。まったく、世話が焼ける。

だが、それも少しの我慢だ。こいつがレベル４０になれば……。そうなれば、用済みだ。

オレはプンと一つの取引をした。

このゲームでは、レベル４０未満のキャラと４０以上のキャラは師弟関係を結ぶことが出来る。師弟関係を結んだペアには様々な恩恵がある。

二人がログインしていると互いの取得経験値が増加する。４０以上は１．２倍。４０未満は２倍になる。

さらに、ペアの片割れがレベル４０に達成して転職を終えると、４０以上のキャラ（この場合はオレが該当する）には、高価な武器が送られる。

オレの目的はそれだ。でなければ……プンのような問題児を抱える気にはとてもなれない。

プンが４０レベルにさえなればいいのだから、最初は適当に付き合って、あとは狩り友を作らせて勝手に４０になってくれればいい。

オレはそれまでログインしなくてもいいし、別のゲームで遊ぶか別のキャラでプレイして、プンが４０になるのを待てばいい。

今だけの辛抱だ。プンの奇行に振り回されるのも、プンのお世話係をするのも、今だけの……。

「っておい、プン！　どこ行った！？」

気が付けば、プンの姿はどこにもなかった。ゲームから落ちたか？

「ここだよおおお；；」

どこからともなく、プンの泣きそうな声（本日６度目）が聞こえてくる。

カメラをぐるぐる回してようやくプンを発見すると、ディスプレイの前でオレは大きな溜め息を付いた（本日２３回目）。

「お魚泳いでるキレイな川眺めてたら、落ちちゃった。てへ（＾－＾＊）」

何がてへ（＾－＾＊）だ。ふざけんな。またリザレクションか。

プンのＨＰは川に落下した時１になり、呼吸できずにダメージを食らい水死体になって、ミロンの村の前の川を流れていた。

ディスプレイの前でオレは本日２４回目の大きなため息を付く。

まだ時刻は午後１０時になったばかり……一時間でオレは２４回もため息を付いたのか。

さっさと４０レベルになってオレから卒業してくれ、プン……。

初めての狩り友

ミロンの村は海に面していて、小さいが港もある。村の前を流れる川はそのまま海に繋がっていて、プンは川で蘇生された後、泳いで海に出ようとした。

『お魚いっぱい取ってくるね、獲りたてはきっとおいしいよ＾ｑ＾じゅるり』などと言って、犬掻きで大海原へ漕ぎ出したプンは、またもＨＰゲージがやばいことになっていた。

リターンを使って、強制的にミロンへプンごと帰還させる。即座に周囲は石造りの簡素な家が立ち並ぶ、閑散とした風景に早変わりした。

「エルくんのイジワル！　お魚はＤＨＡがたくさん含まれてるんだよ！　お肉ばっかり食べてたらダメなんだゾ！　ぷんぷん＞＜」

「お前はアホか」

プンがぷんぷん言い出したので、一蹴してやる。そもそも、このゲームに狩猟とかの要素は無い。

海中を行けば、たまに水中型のＭＯＢと出くわすこともあるが、狩ったところで手に入るのは経験値と少量の金だけだ。それにオレの食生活は野菜が中心だ。ピーマンは苦手だが……。

「プンはアホじゃないよ！　プンだもん＞＜」

意味が解らん。

けれど……確かにオレも始めたころ、ミロンの村の前で川に飛び込んだことがあったな。その時、偶然近くにいたヤツも泳いでて……一緒に泳いだことが縁で狩り友になって……色んな所に行ってバカをしたものだ。

世界が新鮮に見えた。目に映る全てが、キラキラ輝いていた。場違いなくらいレベルの高い狩り場へ迷い込んでしまって、ザコＭＯＢに瞬殺されたり、エリアボスと知らずに殴ったら、他のパーティーメンバーまで巻き込んで全滅したり……。

プンもそうなのか。今のプンには、この死に掛けのカオス・クロニクルが、とてもキラキラと眩しい世界なんだ。オレにとっては……ヒマな時間を潰す、ゴミ箱みたいな所なのに……。

プンもやがて思い知るはずだ。この世界は、自分が思っているほどキレイなんかじゃないことに。

ＭＭＯと言っても、リアルと一緒なんだ。なりたい自分になんかなれない。結局、ここにいるのは現実の自分だ。

それは他のプレイヤーも同じ。『人間』なんだ。『人間』は……残酷だ。昨日まで友達だと思っていたら、今日は平気な顔して、裏切れるんだ。

だからオレは……誰も信じない。リアルもＭＭＯも、信じられるのは自分だけ。他の奴らは、最後には敵だ。友達ごっこの果てにあるのは、残酷な結果だけ。

プンにもそれを教えてやらなければならない。実際、プンだって

ギルドに誘われておきながら、誰にも相手にされていないじゃないか。

プンなら、解るはずだ。

「って、またか！　どこ行った、プン！」

「ここおおおお；；」

なんと、すぐ真横からプンの悲痛な叫び声が聞こえるではないか。カメラを右に向けるが、そこには誰もいない。

プンは確かにそこに存在するのだが、石の壁以外何もない。すると急に、石の壁から人の顔が生え出てきた。

「うわあああああ！？」

「壁にめり込んじゃった、もうお嫁にいけない、つ―；ぐすん」

移動不可状態になって、壁と同化していたらしい。再度リターンを詠唱し、プンを救出すると、村長からクエスト『ゴブリン討伐』を受けさせ、当初の目的地、ゴブリン前線基地へと向かう。

村から歩いて移動すると時間が少しかかるので、テレポーターを利用することにした。

テレポーターは、少々お金を使うが、一瞬で狩り場や他の村に移動できる便利な機能だ。村の広場に突っ立っている若いヒューマンの女性がテレポーターだ。

彼女の前に立つと、プンにゴブリン前線基地へのテレポート代を手渡し、移動する。

一瞬で目の前の景色が移り変わり、不気味な背景が画面いっぱいに広がっている。

ＢＧＭも、それまでのどかだった村のそれから、緊張感のある、今にも戦いが始まりそうなＲＰＧっぽいのに変わる。

前線基地と言っても、切り崩された岩山に木で出来た簡素で居住性のなさそうな小屋が数軒と、丸太を縦に並べただけの柵が周りを覆っているだけ。

所詮ゴブリンの巣である。ＭＯＢのＨＰもそう高いほうではないので、楽に倒せる。

とはいえ、ここをナメてかかると痛い目に合う。ここのＭＯＢはＨＰが２０％以下になると、命乞いをしながら、小屋に逃げ出そうとそる。

逃してしまったら……その時は終わりだと思ったほうがいい。

数匹のエリートゴブリンを引き連れて戻ってくるのだ。数は２か３と大したことは無い、問題は奴らの能力が他のザコＭＯＢと一線を画しているという事だ。

その分、倒したときの経験値と獲得金額もバカに出来る量では無いし、高確率で装備アイテムをドロップする。

上級者の中には、あえてこれを狙う者もいる。だが、装備が貧弱

な上、フェイブのプンではまず詰むだろう。

そこで、オレの出番というワケだ。ターゲットを引き離すのは何も、ナイトのヘイトばかりじゃない。

ヒールライトを連発すれば、ＭＯＢの優先はヒーラーに向かう。ヒール系のスキルは敵対心を煽りやすく、無闇に連発すればヒーラーが襲われてしまうのだ。

そこを逆手に取る。あえてプンにヒールを連発してターゲットをオレに向けさせる。このレベル帯の攻撃なら、ローブ装備のオレでも十分に耐えれる。

その隙にプンに各個撃破させ、一気に成長させる。ちんたらやっている暇は無い。明日は月曜日。学校もあるし、０時には寝ておきたい。

「行くぞプン。オレについて来い」

「あい！　@@ゝ　なんだかエルくん、頼もしい～。もしかして、エルくんて弟さんか妹さん、いるの？」

オレの後ろをぴょこぴょこ付いてくるプンが、無遠慮に質問を始める。

「いるよ、二つ下の泣き虫な弟が一人」

「やっぱりー！　エルくんて頼りになる優しいお兄さんって感じがしてたもん＾＾」

「違うよ、オレは」

と、そこまで喋りかけて後悔した。基本的にオレはリアルを語らない。ゲームはゲームだ。ここは出会い系サイトじゃない。

相手のリアルにも興味がない。オレは、ゲームをしているんだから。

「プンはね～。一人っ子なんだあ。いいな～兄弟＞＜」

「そうか」

「エルくんエルくん！　エルくんはどんなお仕事してるの？　プンは高校生だよ＾＾」

高校生か。確かにそんな感じがするな。リアルのプンも、のほほんとしてて、天然なヤツかもしれない。

「エルくんって落ち着いてるよね～@@　もしかして、３０代の大人だったりする！？　キャーーー渋い！」

「誰が３０代だ！？　オレもお前と同じ高校生だよ。高校２年生だ、１７歳だ。文句あるかコラ！　あるなら２０文字以内で言ってみやがれ！」

しまった。ついつい熱くなって個人情報を一部だが開示してしまった。にしても、なかなか失礼なヤツだな、プンは。

「えーーー@@　同い年なんだ～エルくんってやっぱりすごいんだね。プン、尊敬しちゃいます＞＜ぃ」

どこに敬意を表す部分があるのか解らないが……やっぱこいつ、苦手だ。ペースを崩されるし、行動が読めない。

「……ここでいいか」

ゴブリン前線基地はそれなりに面積が広い。入り口付近は比較的ＭＯＢの数が少ないし、レベルも低めだが、奥のほうに行くと、前述の小屋もあるしワンランク上のゴブリンも出てくる。

岩山の崖になっている所に、木でできたお粗末な小屋……その周りには、６匹のゴブリン。当然、リンクする。適正レベルのプレイヤーが突っ込めばたちまちピンチだが、オレはその適正レベルから２０以上高い。

ゴブリンの群れに突っ込んで奴らの注意を引き付ける。一斉に奴らから袋叩きに合うが、ダメージは一ケタ台だ。

「よし、オレが引き付けている間にやれ、プン！」

「あい！　@@ゝ」

プンの装備している剣が、背後からゴブリンを切り裂く。数回の斬撃を繰り出すとゴブリンは力尽き、地面に倒れフェードアウトし、消える。

やはり、ナイトであってもフェイブだ。攻撃力は他の種族のウォーリア並みである。

瞬く間にプンは全てを平らげる。思ったよりもプンの火力は高い

らしい。これならレベル上げにそう時間はかからないかもしれない。
時間が経てば、すぐにゴブリンが出現するのだがそれだと時間が惜しい。別の場所から数匹引いてくるか。
そう思って移動しようとしたときだ。
スピーカーから、戦闘音が聞こえた。剣撃のＳＥや、ダメージを食らったときのＳＥに、男の太い声。
「他にも狩をしているプレイヤーがいるのか」
「珍しいね@@」
ここからそう遠くない距離にいるようだ。そうだ。丁度いい。そのプレイヤーとプンを一緒に狩らせよう。二人が狩り友になってくれれば、プンの育成をそいつに任せてしまえる。
「プン。一緒に狩りをする友達が欲しくないか？」
「欲しいーー＞＜」
「なら、ちょっと行ってみよう」
プンを引きつれ、音の発生源のエリアまで行くと、そこでは緑色の肌の大男が巨大な剣を両手で振るい、ゴブリンを力任せに切り裂いていた。
「オークだ。オークウォーリアだな、あれは」

６つの種族の一つ、オークは非常に高いＨＰと高い攻撃力を持っている。特に近接武器を得意とするウォーリアとの相性がいい。

反面、足が遅く命中率も低いが少数の人間には好まれている。おおくの人間は、そのビジュアルで好き嫌いが分かれるところだろう。

かっこよくもなければ、かわいいわけでもない。肌は緑色で、髪もスチールウールみたいに硬そうで、筋肉モリモリ。

はっきり言って、イロモノだ。だが、オーク間での友情は厚いらしく、オーク専用挨拶があるらしい。それくらい一部には人気がある。

「プンもオークにすればよかったのにな」

「えーー嫌だよ、かわいくないもん＞＜」

あのオークの大男がプンのようなセリフをしゃべって、死にまくるとする。

……うん。蘇生してもう一回殺すな。オレなら。

「フェイブでよかったな、プン」

「@@？」

オークがその場にいたゴブリンを全滅させたのを確認して、オレは近寄った。

「すみません、もしよかったらこの子と一緒に狩りをしませんか？」

オークは剣を構えたままの姿勢で硬直する。数秒間があって、返事がきた。

「ぬを。ぼくちん如きでいいんですかい？　レベルも低いし、装備もショボーンですぞ（，・ω・、）」

「こっちも似たようなものだし、オレが外部でヒールするんで気にしなくておk」

「ぬを。ほんじゃお言葉に甘えて！　ぼくちんキラ・ヤマモトです、オークウォーリアのレベル21です。別のサーバーから移住してきますた」

「へえ、何で？」

「PKギルドが我が物顔で狩り場占領するんですお。ぼくちんのメインキャラだったラクス・クラタや、アスラン・ザマもよく彼らの毒牙にかかり……コロニーへの移住を決断したのです。地球の重力の井戸に引かれたままでは、ニュータイプに覚醒できないと思いますて」

……オタクかよ。

それにこのサーバー名、コロニーじゃねーし。

「なんだか解らないけど、すごい理由があったんだね@@！　ｐｕｎｐｕｎ３２１だよ～プンって読んでね＾＾」

プンがヤマモトの前に出て、くるっと踊って見せた。

「ぬお。フェイブっ娘！　プンちゃんハアハア」

「ヤマちゃんおもしろーい＾＾　よろしくね！」

またひらりと舞ったプン。ヤマモトは無言であっちにいったりこっちにいったりと、プンの周りをうろちょろしていた。

「何やってんの、ヤマモト？」

「どのアングルが、一番ベストかなって、白っていいよねえ。うぷぷ。中尉もそう思わんかね？」

「＾＾？」

プンはヤマモトの変態行為に気付いていないらしい。あと、誰が中尉だ。

「この変態が！　やっぱりお前はいい！　あっちいけ、しっし！」

「ぬお。変態とは失敬な！　僕は」

ヤマモトのソーシャル『笑う』でオークの巨体が反り返り、豪快な笑い声がスピーカーを振動させ、部屋に響いた。

「ド変態だ！」

GMコールは慎重に

ド変態と開き直ったヤマモト。むさ苦しい、暑苦しい、息苦しい。そして、今もなおプンの背後を動き回っている。ド変態の鑑のような男だ。

はっきり言って後悔している。ヘタをこくと、プン以上に厄介な存在かもしれない。

「やっぱいいや。他を当たるんでさようなら」

こういう事は、さっさと言ってしまった方がいい。失礼だが、なんとなく危ない香りがするのだ。

「そんな！　ぼくちん、プンちゃんの為なら何でもやるよ！」

「そうだよ、エルくん。ヤマちゃんかわいそうだよー＞＜」

プンの心は広い。ヤマモトに背を向け、オレに向き直るとソーシャルで、泣き始めた。そして、その後ろでヤマモトが座って、『プンちゃんおパンツ鑑賞会　ハアハア』をどうどうと開催している。

「ぬを。心優しき我が女神！　あれですか！？　あなたは死なないわ、私が守るもの。でございまするか！？　ぼくちん、プンちゃんとシンクロ率１０００％オーバー！　プンちゃんに向けて、ぼくちんのエントリープラグ強制射出！」

最後のは下ネタじゃないか。もう我慢も限界だ、少し脅してやる。

「おいプン。ＧＭコールだ。へんなプレイヤーに粘着されています、セクハラ発言で不快な思いをしているので対応お願いします。ってＧＭさんに伝えるんだ」

「はーい＾＾」

その後に、『もちろん冗談だ』とプンにウィスを送っておく。

「ぬお、ＧＭコールΣ（。д。）；」

ＧＭ……たぶん、ゲームマスターという意味だと思う。一言で表せば運営だ。不具合が起きたときの報告や、規約違反者を通報する時、ＧＭにメッセージを送る。それがＧＭコールだ。

もちろん、本当に通報するつもりはない。プンだって、解ってるはずだ。これは単なる脅し。

ちなみに、重大な規約違反者については、アカウントの停止や、最悪削除される場合もある。

「まあ、もちろんウソだ。だが、これ以上バカな事を言って付きまとうなら――」

「エルくん、終わったよ＾＾」

「ん？　何がだ？」

「ＧＭコール＾＾　目の前に変態さんがいます＞＜　私襲われそうで怖いです；；　捕まえてください！　ってＧＭさんにメッセージ送っておいたの」

「……」

「ガクブル（（。д。））」

「プン、やればできる子なんだよ。いえーい＾＾v」

「お前はアホか！　本当にやるなんて何考えてんだ！　そもそも、冗談だってウィス送っておいたろうが！」

「えーーーー；；　あ、ほんとだぁ、気付かなかった。あはｏ（≧≦）ｏ」

あはｏ（≧≦）ｏじゃねーよ。

すると突然、ヤマモトがフェードアウトして消えて行った。まさか。

「……噂で聞いたことがあるな。規約違反してＧＭに睨まれたら、特殊なフィールドに転送されるって……」

「え！　ヤマちゃん……ご冥福を祈ります（＞人＜）」

祈るな。

しかし、また突然ごつい緑の巨人が現れ、豪快な笑い声がスピーカーを振動させ、部屋に響いた。

「ヤマちゃんふっかあああっつ！　なんか回線の調子悪いみたいだったけど、直った！」

回線が切れて落ちただけだったか……。

「おかえりヤマちゃん＾＾ノ　プンいっぱい心配しちゃったよお」

さっきまでご冥福を祈っていたお前はどこにいった。

「まあ、もうどうでもいいや。ヤマモト、あっちで一緒に狩ろう。オレがＭＯＢ引いてくるからプンと同じのを攻撃してくれ」

なんだかんだで、貴重なプンと同レベル帯のプレイヤーだ。今日だけは我慢してやる。今日だけは。

それからさっきまで、プンと一緒に狩りをしていた場所に戻ると、ヤマモトを加えて再開する。

プンだけでもお代わりが必要な状況だったので、周囲からありったけを引いてくる事にした。他に人がいないのが、こういう時は助かる。

オレがＭＯＢを引っ張る。プンとヤマモトがそれを倒す。オレがＭＯＢを引っ張る。プンとヤマモトがそれを倒す。それをかれこれ２０分は繰り返した。

その成果で、プンは瞬く間にレベルが２２になり、ヤマモトも２５になった。

ヤマモトの火力もまた相当なモノだ。プンと違い初心者ではないので、狩での立ち居振る舞いをよく心得ている。特にスキルを使うタイミングが絶妙だ。

このままレベルが上がっていけば、上級狩り場でも貴重な戦力として色んなパーティーから引っ張りだこになるだろう。

……これさえなければ。

「「「オレがガ〇ダムだ！！！！！」」」

「「「オレがガ〇ダムだ！！！！！」」」

「「「オレがガ〇ダムだ！！！！！」」」

「「「オレがガ〇ダムだ！！！！！」」」

「「「オレが――」」」

「うるさい」

ヤマモトはどうやら、攻撃スキルを発動する際にマクロを組んでいるらしく、スキル発動と同時に、上のセリフがメッセージとして表示されるらしい。

他にも、『虎牙〇斬！』とか、『オレのこの手が光ってうなるぅ』とか、『分の悪い賭けは嫌いじゃない』とか言っていた。

何を言っているのか、さっぱりわからない、最後の一つだけは。

「しかし、戦ってるときのプンちゃんかわゆす。ハアハア」

「ハアハア言うな、オタクが」

「エルくん、ハアハア＾ｑ＾」

「プン、お前まで真似するな」

「中尉、ハアハア」

「エルくん、ハアハア＾ｑ＾」

「ハアハアうるせえ！　あーもう、１０分休憩！　オレ、飲み物取ってくる！」

「いてらー＾＾」

「あ、ぼくちんコーラでいいおー。ストロー付けといてね、あと、おいしくなるおまじないも、かけてね」

ヤマモトうぜえ。

席を立ち、足早に部屋を出て一階のリビングへと向かう。家族はもう寝てしまったらしく、リビングは真っ暗で誰もいなかった。

時計を見ると、すでに１１時を回っていた。もう少し狩をして、今日は終わろう。

インスタントコーヒーの粉を愛用のマグカップに入れ、ポットからお湯を注ぎ、それをかき混ぜる。少し、冷ましてその場で一口含む。

やはり、コーヒーはブラックに限るな。

マグカップを片手に階段を昇り、自分の部屋へと戻る。机の前にたどり着くとイスを引いて、こぼさないようにパソコンから離れた場所にカップをそっと置く。

「何だこれ……」

席に着いたオレはその光景に絶句する。エルトが……。ＨＰが０になり、戦闘不能になっていた。

オレ以外のメンバーは無事のようだ。離席しているのか、キャラが突っ立ったまんまで、虚空を見つめている。

急いでログを確認する。すると、１０００を超える大ダメージを数発くらっていたことに気が付く。

バカな。このレベル帯でここまで強力な攻撃を仕掛けるＭＯＢはいない。一体何が……。

その時だ。画面の端を何かが横切って行くのがかすがだが見えた。あれは……プレイヤー？

ダメージを一体誰から食らったのかを調べると、オレのキーボードを打つ手がかすかに震えた。

『斬魔』……。

――ＰＫだ。

ＰＫ襲来

ＰＫとは、ＰｌａｙｅｒＫｉｌｌｅｒの略称である。名の如くプレイヤーを殺すプレイヤー……ＰｌａｙｅｒＶＳＰｌａｙｅｒのＰＶＰとは違う。

高レベルプレイヤーの一方的な虐殺を差す場合が多い。

特にこの『斬魔』というＰＫは、１年前からずっと活動を続けている有名なＰＫだ。

種族はダークエルフ。職業はローグで、レベルは６０代後半。武器はデュアルダガー……両手に装備した二振りの短剣だ。一撃の威力は低いものの、攻撃速度とダガーによる必殺のスキル『デュアルスタッブ』は高いＨＰを誇るオークでも、一撃で戦闘不能にする事が出来る。

また、短時間だが姿を消すスキルもあり、気が付くと地面に転がっているなんてこともある。

強敵だ。

それも、『斬魔』はＰＫギルドのギルドマスターで、うかつにＰＫをしようものなら、そいつの所属しているギルドに前面戦争を仕掛けてくる。

畜生……人が席を離れている間にＰＫとは……。

オレの頭には、先ほど淹れたコーヒーよりも熱く煮えたぎった血

液が駆け巡っていた。

……いや……落ち着け。確か持ち物の中には完全に経験値を復旧させる『神秘の復活薬』があったはずだ。プン達にこれを使って蘇生してもらえれば、減った経験値は取り戻せる。

とにかく今は……プンとヤマモトを早くログアウトさせるか、村に帰還してもらうしかない。

「おい、プン！　ヤマモト！　早くログアウトしろ！」

しかし返事は無い。まだ席を離れたままらしい。どうする……？

「たっだいまー／＾＾／」

プンが能天気にも今帰ってきたらしい。

「あれ？　エルくん何してるの？」

「バカ！　ＰＫされたんだよ、一旦ログアウトしろ！　もたもたしてるとお前もやられるぞ！」

『わかった＾＾』。そのプンのセリフが画面に表示されたのと同時、短い悲鳴がして、プンは地面に横たわった。

その後ろに立っていたのは、漆黒の塊。全身を黒いレザーアーマーに身を包み、黒い長髪を風になびかせ、褐色の肌の男が右手の短剣を構え、静かに立っていた。

斬魔だ。

そして、すぐに掛け声とともに画面から消えてしまう。姿を隠し、一撃で仕留める……ヒットアンドアウェイの戦法を得意とするダークエルフローグらしい殺し方だ。

「ヤマモト！　いるならすぐにログアウトしろ！」

しかし、ヤマモトからの返事は無い。このままでは、全滅だ。

「ぬを。何ぞこれ！？」

「ＰＫだ。早くログアウトしろ。２０分後にまたログインしてくれ。その頃にはあいつもここを離れているはずだから」

「わかった。ぼくちんがＰＫＫしちゃる！　プンちゃんをこんなけしからん格好にしたＰＫは許せん！　ハアハア」

「やめろって！　相手はレベル６０代のダークエルフローグだぞ！　生き残ってるのはお前だけなんだ！　神秘の復活薬を渡すからこれでオレを蘇生して――」

しかし、ヤマモトはオレの言葉を聞かずに飛び出していった。バカな事を……敵うはずがないのに。

ヤマモトが走っていた背後に、忽然と姿を表した斬魔。ヤツの体が光を放ち、足元に光が渦巻く。スキルが発動したのだ。

『デュアルスタッブ』が。

しかし、スキルは失敗してしまったらしく、ヤマモトのＨＰは１

ミリも減っていない。ヤマモトはそれを実力差と勘違いしたのか、振り向くと大剣を頭上高く掲げ、それを一気に斬魔へと振り下ろした。

だがしかし、その攻撃は虚しく空を斬る。今度は横からの一薙ぎ。それも軽くかわされてしまう。

斬魔が消える。とっさにヤマモトは背後に振り返りデュアルスタッブの一撃に備えようとする。しかし――斬魔が姿を現したのは、ヤマモトの背後。

つまり、もともとヤマモトの正面に出るつもりでいたのだ。

斬魔がヤマモトに攻撃を仕掛ける。スキルではなく、通常攻撃に切り替えたらしい。獣が吼えるような、双剣による連撃。息を付く暇すら与えない。

しかし、ヤマモトはそれに耐える。まったくＨＰが減っていない。……減っていない？

注意深く斬魔の両手を見てみる。ヤマモトのＨＰが減らない理由がすぐに解った。

素手だったのだ。斬魔は、最後に残ったヤマモトをすぐにＰＫしようともせず、遊んでいるのだ。

「てめえ！　ふざけんじゃねえぞ！」

激昂したヤマモト。通常のチャットではなく、エリア一帯に響き渡る、シャウトでそう叫ぶ。

なおも素手で殴り続ける斬魔。ヤマモトはその斬魔を攻撃しようとするが一向に当たる気配を見せない。

当然だ。４０近いレベル差に加え、オークの命中率とダークエルフの回避率。分が悪い所の話では無い。相手が悪すぎる。

「「「オレがガ〇ダムだ！！！！」」」

ヤマモトのスキルが斬魔に襲い掛かる。奇跡的な確率で命中したその一撃は、斬魔にとっても予想外のことだったらしい。

急に素手で殴るのをやめると、双剣を装備して音も無く消える。

そして次の瞬間にはヤマモトの大きな体が崩れた。

「キモオタザマアｗｗｗ　テラワロスｗｗｗ」

斬魔がソーシャルで笑う。そして、シャウトでそう言った。

「ちくしょう……」

ヤマモトはそう呟く。完全に遊ばれた上に瞬殺された。だから……やめろと言ったのに……。

斬魔はすぐにここを去ろうとはせず、不意にヤマモトへと向かって歩き出した。

そして、ヤマモトの死体の前に立つと、その上に座り込んだ。さらに、ガラクタやゴミアイテムをヤマモトの周りにバラ巻いて、周

囲を埋め尽くす。

「ここは緑のゴミ箱。あーくっさ。ゴミはゴミ箱に捨てちゃう俺様SUGEEE」

「くそ」

PKは……最悪だ。オレも今は手も足も出ない。……不意打ちでなくとも、オレだって一撃でPKされてしまうだろう。

せっかく積み上げた経験値も、狩り友と過ごした楽しい時間も……こいつらは平然と踏みにじって、その上に唾を吐きかけて嘲笑う。

オレの視線はリスタートボタンに注がれていた。エルトでは勝てない。けれど……あいつなら……。『本当のオレ』なら……こんなヤツ、簡単に……。

リスタートボタンにカーソルを合わせた時。白い小柄な少女が、斬魔の背後に立っていた。

誰だ？

「ヤマちゃんをこれ以上いじめるな＞＜」

プンだった。

隣を見ると……戦闘不能で横たわっていたはずのプンがいない。まさか、こいつ……蘇生を……経験値の復旧をあきらめて、村に戻ったあと再びここに……戻ってきたのか。

「ｗｗｗ」

プンが斬魔にしかける。しかし、当たらない。

「フェイブってｗｗｗ　ちょｗおまｗｗｗ」

斬魔は依然座ったままである、それでも攻撃が当たらない。だが、プンはそれでも無意味な攻撃を繰り返す。

「ネタやんｗｗｗ　しかも、灰色の狼って。これは戦争やなｗｗｗ」

斬魔はやれやれと言った感じで、起き上がると姿を唐突に消した。

ダメだ。早く逃げろプン。お前の安っぽい友情だか正義感で立ち向かっても、どうしようもないんだ。だから、もうやめろ。

そして、再び姿を現した斬魔。

プンは背後を取られて――。

斬魔が吹き飛んだ。

吹き飛んだのだ。

斬魔の背後にいた、銀髪の白い素肌をした赤い目の青年に。

フェイブナイト。フェイブナイトの青年である。

「@@？」

プンは何が起こったか理解できず、その場に立ち尽くす。

斬魔が体勢を立て直し、フェイブナイトの青年の姿を認めると、ターゲットを変更し、そちらに向かう。

フェイブナイトの青年も、斬魔に向かって走り出した。

……ムダなことだ。

あいつには、勝てない。

フェイブナイトの青年はヤマモト以上に巨大で凶悪そうな剣を構える。

斬魔は、馬鹿の一つ覚えのように姿を消して、青年の背後へと回り込もうとする。

フェイブナイトの青年の足元に光の渦が巻き起こり、それが体全体に行き渡る。

そして、その刹那に姿を現した斬魔が間髪入れずにデュアルスタッブを叩き込んだ。

しかし、青年には何のダメージもない。ヤマモトの時のようにスキルが不発したわけではない。確かに命中していた。

だから、斬魔はあいつには、勝てない。

「プン。よく見ておけよ……あれが、このサーバーで最強のナイト……フェイブナイトの椛(もみじ)だ。そしてあれが、６０レベルで覚えるフ

エイブナイトの神スキル、ヴァンガード……」

椛、舞う

ヴァンガード。確か英語で前衛っていう意味だったと思う。

このスキルが神スキルである理由は、フェイブの特性と関係している。これまで何度も触れてきたようにフェイブは他種族よりも飛びぬけた攻撃力を持っている。

それは、近接物理職で一番攻撃力の低いナイトですら、他種族のウォーリア以上の攻撃力を持つ。

しかし、最大の弱点が打たれ弱さだろう。それを克服するのがヴァンガードである。

ヴァンガードは、スキルを使用したプレイヤーの攻撃力と防御力を入れ替えるスキルなのだ。

仮に攻撃力２３００　防御力　５６０なら、それが攻撃力５６０　防御力　２３００となる。

このスキルはトグル型……ようするにスイッチのように、オン・オフする事が出来るもので、リアルタイムに使用することができる。

椛はこれを絶妙なタイミングで、攻撃の瞬間にオフにし、防御の瞬間オンにすることができる。はっきり言ってかなり面倒というか、細かい作業であったりする。

そのお陰か、１年前から『トーナメント』で勝ち続けており、現在ではナンバー１の地位にいる。

その椛が……目の前にいる。

何故ここにいるのか？　理由は簡単だ。斬魔がプレイヤーを狩るＰＫなのに対して、椛はＰＫを狩るＰＫＫなのだ。

おそらく、この辺りに網でも張っていたのかもしれない。斬魔に対して個人的な恨みを持つものは少なくないので、斬魔を見かけたという情報を誰かが椛に流した可能性がある。

不意に斬魔が動いた。ヤマモトの時と同じ様に姿を消し、椛の前に現れる。椛はすぐさまヴァンガードを展開。嵐のような斬撃を大剣で受け止める。

椛はナイトでありながら、盾を持たない。その代わりに武器の中で一番攻撃力の高い、大剣を装備している。これは、ヴァンガードの恩恵を大きくするためだろう。

オレは二人が戦っている間に、プンに神秘の復活薬を渡して、蘇生してもらうと、すぐにヤマモトにリザレクションをかけた。

再び視線を彼らの戦いへと移す。斬魔が押されている。ヴァンガード状態の椛に傷を付けるのはそう容易いことではない。あとは時間の問題だろう。

再び斬魔が消える。椛は不意打ちに備える。しかし、５秒経っても１０秒経っても奴の姿は現れない。

「あ！　エルくん下見て！」

プンの言うとおり、崖の下を見ると逃走中の斬魔の後姿があった。
……逃げたか。
「プン、ちょっとあの人にお礼言ってくるね＾＾」
プンは戦いが終わり、大剣を背中に背負い、戦闘状態を解除した椛に駆け寄った。
「助けてくださってありがとうございます」
早速、打ち間違えたらしい。
「いえ、別に。ＰＫを潰すのが趣味なんでね」
椛は素っ気無くそう答える。
「強いんですね、ビックリしちゃいました@@w」
「俺なんか……大したことないですよ。カインさんに比べたら……」
「カインさん（？＿？）」
「ああ、初心者の人ですか？　なら知らないのも当然ですかね。カインさんは、一年前までこのサーバー最強のナイトだった人です。俺も初心者だった頃、色々お世話になったっけ」
「へえ、その人。今はどうしてるんですか？？」
「一年前くらいに……ちょっと事件があってね。それが原因で突然

誰にも言わずに引退しちゃったんですよ。今はどうしているのか……」

椛は、背中を向けこの場を去ってゆく。

「斬魔がまた別の狩り場に現れたようなので、行きます。狩り……頑張って下さい。それでは」

次の瞬間、椛の姿はそこには無かった。

「あの人、すっごく強かったね@@w　プンもあんな風になりたいなあ～＞＜」

「ぬを。プンちゃんの好意がさっきのフェブ男に向かっている！？許すまじ、あの男め！」

ヤマモトのほうも、落ち着いたらしい。目の前で椛が仇を討ってくれたこともあるのだろう。……逃がしてしまったが。

「あれれ。そういえば、エルくんって椛さんと知り合いだったの？椛さんの事、詳しかったみたいだし@@」

「別に。このサーバー最強のナイトの情報くらい、ベテランならみんな知ってるさ。椛はＰＫＫとしても有名だしな」

「ふーん、そうなんだあ。。」

椛が消えた方向へとカメラを向ける。

ふと、思い出す。あの日、オレの前で装備も何も付けず、スキル

の使い方をまったく知らずに狩をしていた、一人の初心者プレイヤーの事を。

……強くなったんだな、椛。

目覚め→リアル

椛が去って、数分後。日付が変わってすでに午前０時１０分。オレ達は今日はもう、狩りを終えて解散することにした。

リターンを使用して、ゴブリン前線基地から一瞬でミロンの村へ。村の広場で輪になって別れの挨拶をそれぞれ告げる。

「ぬお。もう月曜か……あああああああああ！　うつだ。明日からまた仕事だ（。д。）　上司ブチ殺してええええ」

ヤマモトがうなった。社会人だったのか、こいつ。もう少し落ち着いてもらいたいものだ。

「ヤマちゃん、がんば＾＾b」

「早く寝ろ」

「あ～い。そんじゃ、プンちゃん、中尉おやすも～」

ヤマモトの姿はすぐに消えうせ、広場に残ったのはオレとプンだけになる。

「エルくん。ありがとねー！　プン、今日だけでレベルが９も上がったよ！」

本来ならば１０上がったはずなのだが、斬魔にＰＫされたお陰でプンのレベルは一つ下がってしまった。

「明日もよろしくね♪」

明日……いや、今日の事か。インするわけがないだろう。お前にはヤマモトという、頼りになる狩り友ができたんだ。

これ以上オレを……振り回すな。

「オレは、今日用事があってインできない」

「じゃあ、明日だね＾＾！」

「明日も用事がある」

「じゃあ、明後日＾＾」

「明後日も用事がある」

「明々後日も用事がある」

すると、急にプンから返事がなくなった。沈黙すること3分……。そのままログアウトしてやろうかと思ったが、不意にプンが何かしゃべりだした。

「ごめんね、ちょっとギルドチャットに夢中になってた」

オレの事は無視してギルメンと仲良くおしゃべりか。

「まあ、そういうことだから、しばらく忙しくてログインできないんだ。なんだったら、ギルメンに声掛けてみろよ？　きっとお前の育成手伝ってくれるって」

「無理だよ」

「は？　無理ってことないだろう」

消極的な奴だな……。もう一言いってやるか。しかし、オレの言葉はプンの一言で遮られる。

「だって……プンのギルド……もうないから」

「え？」

「追放されちゃった＾＾；　プンが斬魔って人に攻撃したから、それを理由に戦争を仕掛けるっていわれたらしいの」

あの時か……斬魔も確かにそんな事を言っていたな。

「だから、戦争を起こさないためにプンを追放するんだって。しょうがないよね。みんなに迷惑かけたくないし。プンが抜けてみんなが喜ぶんだったら、しょうがないよね」

あの斬魔がそれくらいで引き下がるとは思えないが……これが、今の灰色の狼のやりかたか。変わったんだな。

「だからね、プン、もう一人だよ。でも、エルくんがいるから平気＾Ｏ＾」

厄介な事になった。狩り友ができたとはいえ、ヤマモトは社会人だ。そうなれば、学生であるオレ達よりもインする時間は短いし、平日は夜くらいだろう。

となれば、同じ学生であるオレを頼ってくる頻度が非常に高い。ギルドすら抜けてしまったプンに、もはや知り合いというのはオレかヤマモトだけだ。

オレは一人がいいのに……。このままでは、プンが４０レベルになるのが遠ざかってしまう。他にも狩り友が必要だ。

くそ……仕方がない。もう少し付き合ってやるか。

「プン」

「？」

「明日の予定なんだけどな、オレの見間違いだった。明日はなんとかインできそうだ」

「やったあ≧ω≦」

ほんの少しだけ……だけどな。目下の目標は、こいつに狩り友を作ること。オレがいなくても、一人で野良のパーティーに行ったり、ソロできるだけのプレイヤースキルを身につけてもらう。

問題山積みだな……。

「じゃあ、寝るな。プン、お前もさっさと寝ろよ、遅刻するぞ」

「おやすみ、エルくん＾＾」

オレは、ログアウトした。

ＰＣの電源を落とし、ベッドの上に頭から突っ伏する。すると突然眠気が襲い掛かってきた。

……風呂は朝起きたら入ろう。

それにしても、厄介なことになったな。ｐｕｎｐｕｎ３２１……リアルはどんな奴なのだろうか？

一度、顔を拝んでみたいものだ。

そんなことを考えているうちに……オレの意識は闇の中へと沈んでいった。

＊＊＊＊＊

眠い。これは相当に眠い。昨日、夜遅くまでゲームをしすぎたせいか……。

学校の自席で、俺は何度もあくびをかみ殺した。なんとか遅刻せずに済んだものの眠気が何度も俺を襲ってくる。

季節は９月。夏休みが終わって、今だ休み気分が抜けきらないクラスメイト達は、朝から元気いっぱいでうるさい。少しその元気を分けていただきたいもんだ。

と、まどろみながらそんな事を考えていると、チャイムが鳴って担任が教室に入ってきた。

朝の挨拶と、連絡事項の確認。ホームルームも終わり去っていくのかと思いきや、唐突に教室の扉を開けて、外に向かって手招きをしている。何だろうか？

クラスメイト達は皆、扉に注目する。そして、そこから一人の女子生徒が顔を出す。

同時に、クラスの男子生徒（ハイエナ）どもは、歓声をあげる。もちろん、俺もだが。

ゲームで例えるなら……カオス・クロニクルで例えるなら、エルフ。涼しげな眼差しと、柔らかいシルクの様な肩甲骨あたりまで伸びた髪。チェリーピンクの唇から紡ぎ出されるのは、どのような声なのか。

日本人形の様な美しい顔。胸も……適度に大きい。美少女だった。

「えっと……相羽（あいば）　真理奈（まりな）です。親の仕事の都合でこの近くに越してきました。転校してまだ右も左も解らないので、助けていただけると嬉しいです」

転校生……相羽　真理奈。担任からの紹介と自己紹介を終えると、彼女はそよ風のように優しい歩調で歩き、指定された席へ……俺の右隣へ舞い降りた。

「よろしくね」

柔らかい微笑み。微かに漂う石鹸の香りが鼻腔をつき抜ける。まるで、夢を見ているようだった。

「あ、俺。渡辺翔（しょう）。これからよろしく」

１２０円の転校祝い

なんとか自分の名前を言えたが、俺は内心かなりどきどきしていた。こんなかわいい子が俺の隣にやってきた。どこぞのギャルゲーじゃあるまいし、まだ俺は夢を見ているんじゃないかとも考えてしまう。

こっそりと右へと視線を向ける。ホームルームを終えた教室は、一時間目までの僅かな間に少しでも相羽さんと仲良くなってやろうという下心丸出しの男子と、自分達のグループに引きずりこもうと画策する女子達で人口密集地となっている。

転校生というのは、それだけで話題性があるものだ。それもこんな美人じゃ、話しかけたくもなるか。だが、俺にはお隣さんというアドバンテージがある。

何も焦ることは無い。

話しかける機会なんていくらでもあるさ。そう思って、再び右へと視線を向けると……。

相羽さんの横顔を偶然視界に捉えることが出来た。

違和感。そうだ、些細なことなのだが……そこに違和感を感じる。

すぐ右には、にぎやかなクラスメイト達を絵に描いたような光景があるのに、その中心の相羽さんは楽しそうじゃない。

口は笑っているけども……目が笑っていない。

どれだけ価値があるのか解らない、ダイヤモンドのような輝きを放つキレイな瞳は、何も写していない……そんな気がした。

やがてチャイムが鳴り、クラスメイトはすぐに自分の席へと戻るため散っていく。そして、唐突に訪れた静寂。

相羽さんは緊張しているのかもしれないな。転校初日に一気にこんなに話しかけられたら、ウンザリしてしまうかもしれない。そっとしておいてあげるのが、一番なのかも。

やがて、一時間目の授業が始まり……二時間目、三時間目、四時間目が終わって、昼休みになった。

俺は席を立ち、学食に向う。

「ナベ！　学食？　俺も俺も。一緒に食おうぜ」

クラスメイトの一人が俺に話しかける。そうそう、俺のあだ名はナベとか言われてる。一時俺の事をオナベとか冗談で言い出した輩がいたが、そいつにはデュアルスタッブ（割り箸でだが）を決めてやった。

ナベとオナベじゃ意味が全然違うだろう。

数人のクラスメイトと一緒にじゃれ合いながら学食へと向う。適当に空いている席を見つけてそこを拠点に、半分を食券係りにして半分を拠点防衛に当たらせる。

俺と稲田というクラスメイトが席に残り、他の奴らを待つことに

なった。

「なあ、相羽ってさ、この前お前が貸してくれたエロいＤＶＤに出演してた、ＡＶ女優に似てない？　いや……この前のエロゲーのヒロインかな？」

自称エロゲー博士。通称歩く下ネタ製造機。それがこの稲田　大河という男であった。当然、クラスの女子からは嫌われている。

運動系の部活に入っているでもなく、スポーツ刈りでメガネをかけたその風貌は地味という言葉がピッタリと似合う。

「ナベはさ……もう見たの？」

「何が？」

「相羽のパンツ」

赤面しそうになる。こんな学食のど真ん中で、パンツ見たのとか、ありえない。

「見るわけねーだろ！」

見たいけどな。そんな機会があるものなら。

ちなみに、稲田は純白が好みらしい。クマさんも捨てがたいらしいが……まるで健全な男子高校生の鑑の様な奴だ。もちろん見習うつもりなどないが。

……俺はしましまがイイな。

その後、稲田を放っておいて俺とクラスメイト達は昼食を済ませると、それぞれ学食で別れて昼休みの余暇を過ごすことになった。

俺は学食の隅にある自販機へと向かい、カフェオレでも買うことにした。財布の中から小銭を取り出し、一枚一枚入れる。

ボタンを押そうと手を伸ばしたとき、石鹸の香りがたちこめた。

この香りには覚えがある。そう、彼女だ。

相羽さんが隣に立っていた。彼女は一体、何を買おうとしているのか。普段なら、クラスメイトの女子が青汁を飲もうがプロテインジュースを飲もうが知ったことでは無いが、今日は特別気になった。

視線は彼女に向けていないので、気付かれていないはず。そっと、慎重に。隣に視線を移す。

不意に俺の指先に何かが触れて、ガコン。と音が鳴る。足元の取り出し口を見ると、黒い缶が吐き出されていた。

「……あ」

間違えてボタンを押してしまった。しかも……缶コーヒーのブラックだ。

まずった。今日はブラックという気分じゃない。少し甘いカフェオレが飲みたかったのに……。

「それ、どうしたの？」

と、ふと隣から小鳥のさえずりが聞こえてくる。

「あ、相羽さん。いや……間違えちゃって。困ったな、俺、カフェオレ飲みたかったんだよね。もう一本買うか……」

「ちょうだい」

「え？」

「私、ブラック好きなんだ。コーヒーはブラックしか飲まないから」

意外だった。女の子がブラック飲むのって、俺にとってはちょっと意外だ。素直に尊敬した。

なんか、大人っていう感じだ。

「あ、うん。お金はいいよ、転校祝いにあげる！」

「ほんと？　えーと……渡辺くん？　だったよね？　転校祝い。ありがたくいただくね」

微笑んで、缶のプルタブに白い指が触れる。今、俺は思った。

――プルタブになりたい。

そして、黒い缶が……チェリーピンクの唇に……吸い寄せられ。

触れる。

直後、黒い液体が俺のコーヒーが……彼女の中に進入する（この表現エロいな）。

苦さに顔をしかめるでもなく、おいしそうに飲み干す相羽さんの顔には、幸せという字が顔に書いてあるといったような満面の笑み。天使だ。

今、俺は思った。

――コーヒーになりたい。

「転校祝いごちそうさま。また教室でね、渡辺くん」

そっとゴミ箱に缶を捨てた相羽さんは、まるでテレビのリモコンの消音ボタンを押したかのように静かに音も無く去っていった。まるで、風のように。

俺はそっと願った。１２０円の転校祝いが、恋の始まりになりますようにと。

目標を持つことは、ステキな男性への一歩？

突如俺の願いを遮るように稲田がやってきて、目の前のゴミ箱におもむろに右手を突っ込んで黒い缶を取り出した。

「ふひひひ！　ナベ、悪いがこいつは俺がもらう。相羽の飲んだコーヒー……」

稲田は気持ち悪い笑みを浮かべながら、学食を去っていった。缶をどうする気だ。

ちゃんと言ってやるべきだったか？　学食の自販機の横にはゴミ箱が二つある。うち片方には先ほど相羽さんが捨てた缶が入っており、もう片方には柔道部３年生の佐藤先輩……身長１．９メートル、体重０．１２トン。マウンテンゴリラ佐藤の異名を持つ、彼が飲み干した缶が入っていたのだが……どんな味だったのか、後で稲田に聞いてみよう。あいつには相応しい末路だ。

学食から教室へと帰還すると、自分の席に着こうとしたら生徒の山ができていて、それは不可能となった。

相羽さんを中心とした人の渦は、楽しそうな笑い声を教室に振りまき、それに参加しなかった者は教室の片隅で暗く寂しく一人の時間を過ごしている。

邪魔だな……こいつら。だいたい、相羽さんにそんな付きまとったら迷惑だろう。彼女の気持ちも考えてあげるべきだ。

溜め息を付いて手近の空いてる席に腰を落ち着かせ、会話の内容

に耳を傾ける。

「相羽さんって彼氏とかいるの？」

早くもプライベートに突っ込んでいる奴がいるな。いいぞ。もっと聞き出せ。

「いないよ」

相羽さんは、はにかんだような声で、恥ずかしそうに答える。ついでに誰か好きな異性のタイプも聞き出してくれるとありがたい。

「じゃあじゃあ！　どんな男の子がタイプ？」

「マジメな人かなあ。しっかりと目標を持っていて、それを最後まで成し遂げる強い意志を持った人」

むむ。マジメというのは、俺にピッタリと当てはまる。目標を成し遂げる強い意志……か。

とりあえず、投げっぱなしにしていたジグソーパズルを帰ったら完成させよう。

と、そんな事を考えていたら昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴って、人の渦はバラバラと散っていった。

その後、５時間目と６時間目を終え、今日一日の授業が全て終了する。

ホームルームが終わると、相羽さんは女子数名に連行され、教室

から出て行った。カラオケに行くらしい。

俺も誘われたが、今日は用事があるので泣く泣く見送った。相羽さんの歌……聴きたかった。

何を歌うだろうか？　もしかして、アニソン？　アニソンとか歌わせたら、萌えるな。ああ、行きたい。けど、行けない。

俺は、教室から去っていった彼女の後姿の残像を目に焼き付けたまま、我が家へと帰宅した。

＊＊＊＊＊

晩御飯を食べて自室に戻ると、オレは机の上のノートＰＣの電源を入れ、立ち上げる。

食後のコーヒーを机の端に置いて、カオス・クロニクルの世界へ。ＩＤとパスワードを打ち込み、キャラクター選択画面へと移動すると、そこには二人の少年が青空をバックに草原で佇んでいた。

オレは、金髪の少年の隣に立っている青い髪の少年、エルトを選択する。

ローディング画面が表示され、待っている間にコーヒーを一口する。舌の上に広がる香ばしさと、ほんのりとした苦味が脳を刺激し、意識を覚醒させる。

これがなければ始まらない。

やがて、ディスプレイにはミロンの村の景色が映し出され、目の前にはフェイブの少女が立ち尽くしていた。

「エルくん、遅い～；；；」

「よう、プン。ってずっと待ってたのか？」

「うん！」

よほどヒマなんだな、こいつ。勉強とか大丈夫なんだろうか？いや、案外これでいて頭はかなりよかったりするのかもしれない。

「さて、今日は……そうだな。お前、パーティーリーダーになってメンバーを集めてみろ」

「ええ@@」

「ええ。じゃないよ。一番早いのは、同じレベルの仲間を集めることだ。それを繰り返している内に、仲が良くなって友達になる。そうなると、その仲間と固定メンバーで狩りにいくこともあるだろう」

「でも、プン。知らない人とお話するのは苦手。。」

「じゃあいい機会だ。苦手を克服しろ。お前には明確な目標がない。いつまでもオレにぶらさがっているだけじゃダメだ。独り立ちできるだけの知識とスキルを身に付けろ。オレはお前の保護者じゃないんだからな」

ちょっとキツイ言い方になったかもしれないが、これはプンの為でもある。プンの職業はナイトだ。ナイトはソロ向きの職業じゃない。今のレベル帯ならばソロはまだなんとかできるが、高レベルの狩り場になればなるほどソロは困難になる。

だから早めにパーティーに慣れさせる必要がある。

「いいか、プン。まずメニューを開いて、そこからパーティーマッチを選ぶんだ。そしたら、パーティー作成ボタンを押して、コメントに『狩り友募集。一緒に炎の祭壇で狩りしましょう＾＾ノ』と入力しろ」

「わ@@　ちょっと待って＞＜」

トロ臭い奴だな。再びコーヒーを口に含み、プンの作業が終わるのを待つ。パーティーマッチ（以下マッチ）を作ってもすぐに他のプレイヤーが来るわけでもない。

少し、このカオス・クロニクルの世界観と職業についてお勉強させてやらないとな。

猫耳魔法少女は♂？

カオス・クロニクルは、６つの種族と８つの職業の組み合わせでキャラの能力が変わる。

まずは種族。

ヒューマン。平均的な能力値を持つ初心者向けの種族で、どの職業とも相性がいい。

エルフ。攻撃力と魔力が低く打たれ弱いが、回避率や攻撃速度、詠唱速度が高いので、アーチャーや、ヒーラーと相性がいい。

ダークエルフ。攻撃力と魔力はヒューマンを少し上まる程度だが、クリティカル率とクリティカル時の攻撃力が非常に高い。その分エルフよりもさらに打たれ弱い。ローグ、ウィザードと相性がいい。

オーク。全種族中最高のＨＰを誇り、一撃一撃の攻撃力が高い。しかし、速度に関しては全種族中最悪で、特に後衛の魔法系職業とは相性が悪い。とりわけ、ウォーリアが一番相性がいいが、ナイトという選択もある。

ドワーフ。能力はヒューマンを劣化させた感じになる。どの職業もこなせるといえば、こなせるが反面特にどの職業と相性がいいというわけでもない。しかし、ドワーフは唯一生産系のスキルを使えるという魅力がある。

フェイブ。低いＨＰ。低い防御力。それを補って有り余る攻撃力、魔力、ＭＰ、速度、回避率。基本コンセプトは『殺られる前に殺れ』

、『攻撃は最大の防御』と言ったところか。実装当初はここまで極端なパラメーターではなかったのだが、ナナメ上行くアップデートのおかげでネタと化した。

次に職業。

ウォーリア。剣、槍、斧・鈍器、デュアルソードを使いこなす近接戦闘のエキスパート。スキルはジャンプして目標に飛び掛る『メガクラッシュ』や、大ダメージを与える『クリティカルブレード』など、多彩で派手なエフェクトのスキルが充実している。

ナイト。剣と盾を装備する。パーティーの壁。ヘイトスキルを使用して自身にターゲットを固定させたり、スキル『ファイナルプロテクション』で防御力を一時的に底上げすることができる。

ローグ。デュアルダガーを装備する。暗殺者。一撃で敵を仕留める事も可能な『デュアルスタッブ』に、5秒間姿を消す『サイレントステップ』で敵を不意打ちできる。

アーチャー。弓を装備する。遠距離からちくちくと攻撃でき、視点モードを切り替える事で、ピンポイントで相手の部位を攻撃できる『スナイプ』が使える。

ウィザード。攻撃魔法を使いこなす。魔法書を装備する。地水火風の属性攻撃魔法を使いこなせるが、覚える魔法は種族によって一部異なる。例えると、ヒューマンが覚えるブレイズアローはフェイブは覚えず、代わりにダークアローを覚える。

ヒーラー。回復魔法の使い手。杖を装備。回復魔法全般と、一部だが強化魔法(バフ)も覚える。このヒーラーの技量によってパーティーの

生存率が大きく変動する。

サマナー。召喚獣を使役する。装備は杖・魔法書。使役できる召喚獣は、狩り場に出現するＭＯＢである。自分のレベル＋５までのＭＯＢと召喚契約を結べるが、最大３匹までしか契約できない。使役できる召喚獣は原則一匹のみである。主人のレベルに合わせ召喚獣もレベルが上がるので、こだわりのあるプレイヤーは、ゴブリンを最大レベルまで育て、それを最高狩り場で使役するという。

エンチャンター。強化魔法（バフ）を使いこなす。装備は特に何の縛りもなく、全ての武器を装備できる。が、攻撃スキルもないし、攻撃魔法もない。しかし、自分を含めたパーティーメンバーの能力を大幅に強化する強化魔法（バフ）を使えるので、ある程度のソロは可能である。ナイト、ヒーラーに続いてパーティー狩りでは必須の職業だ。

「……こんなもんかな。わかったか、プン？」

返事がない。

「プン」

しかし、返事はない。

「あああああああ、ごめん。寝てたｚｚｚ」

「寝落ちとは、やってくれるな」

「だって、エルくんの説明長いんだもん；Ｏ；」

「お前はアホか。これくらい頭に入れておけ。基本だ。できる前衛ってのは後衛の経験もあるし、できる後衛ってのは前衛の経験があるもんだ。互いが互いを思いやれば、それは自然に理想のパーティーの動きになる。だから、公式に載ってる全種族、全スキルのデータを頭に入れておけ」

「そんなの無理だよ～；；　あ、それならエルくんもヒーラー以外の職で前衛やったことあるの？？」

一瞬答えるべきか躊躇した。しかし、自分で吐いた言葉を自分で踏み潰したくない。ここで『やったことがない』なんて言ったら、できる後衛じゃないと自分で言ってしまうようなモノだ。プンにナメられるわけにはいかない。

「まあ、な」

「おおｗ@@ｗ」

それ以上答えるつもりは無いので、話題を変えようとした時、いいタイミングでヤマモトがログインしてきた。

オレとプンの真後ろにヤマモトの巨体がうっすらとフェードインして、カオス・クロニクルの世界に形作られていく。

「ソロモンよ、私は帰ってきた！！」

何のセリフだか解らないが、またもシャウトでエリア一帯にヤマモトの声が響く。

「ヤマちゃんこん＾＾」

「ぬお。プンちゃん、今宵も一段とハアハア」

「ハアハア＾q＾」

「お前らヤメロ」

プンがヤマモトに連られ、ハアハア言い出したので止める。それにしても、予想よりも早くヤマモトがログインしてくれたので助かった。

「いや～とりあえず、仕事放り出して帰ってきた！　上司が何か言ってけど無視してやったw」

……ダメな大人がここにいる。

「そんなことしてたらクビ切られるぞ。オレはよく解らないけど、再就職って難しいんだろ？　てか、それって大人としてどうなのよ？」

「てへ、中尉にほめられちった（／／▽／／）」

何を言ってもダメなようだ。それ以上何も言わないことにして、プンの開いたパーティーマッチに再び目をやる。

「おい、プン。パーティー希望者が来たみたいだ。えっと、すぺりおる……だな。このすぺりおるって奴を招待しろ」

マッチには一人のプレイヤーが顔を出していた。名前はすぺりおる。職業はドワーフエンチャンター。エンチャンターか。都合がい

いな。

プンが四苦八苦しながらすぺりおるを招待する。事前にオレとヤマモトもパーティーに入っていたので、４人分のＨＰバーが画面上に表示される。

「よろしくぅ」

すぺりおるの発言。と、それと同時オレ達の前方にドワーフの少女がとことこと歩いてきた。

このカオス・クロニクルにおいて、ドワーフ＝ヒゲもじゃジジイという想像は間違いである。

ドワーフは男女とも、小学校高学年くらいの幼い少年少女である。こちらもオークとは違う意味で人気が高い。特に、ドワーフ女は。

目の前に現れたドワーフの少女は、頭に猫耳を装着し、ピンク色のローブ（これまた丈が短い）、杖を装備していて魔法少女然としていた。

「ぬお。す、すぺりおるたん、ハアハア」

案の定、ヤマモトのハアハアがすぺりおるに炸裂する。

「かわいいいーーー＞＜ｗ　すぺりおるちゃん、かわいい！」

プンは、ドワーフ女を見るのが初めてなのか、近寄って抱きつくソーシャルをする。ちなみに抱きつくソーシャルは、相手側の了解を得られないとできない。

「レベル２８のドワーフエンチャンターだぜぃ。緑のおっさん、ムサイから近寄るな。ねーちゃんエエ尻しとるのぅ」

「ぬを。まさか、すぺりおるたんって……」

「あぁ、俺、ネカマだから」

ドワーフ女の８割は中身が男だという噂があった。噂は真実らしい。

いつかあの日のように

すぺりおるの中の人は男。まあ、ヘンに女言葉を使われるよりもオープンな方が、さっぱりしてていいかもしれない。

ドワーフ女、通称ドワ娘は一部に熱烈な人気があると先ほど説明したが、ドワーフ男、通称ドワ坊も人気がある。これもまた、一部に。

そのドワ娘とドワ坊だけで構成されたギルド『幼稚園』は、ドワ信者の巣窟である。待て、そういえば……幼稚園のギルドマスターの名前はスペリオルだったはず。

こいつ……スペリオルのセカンドか？

ちなみにセカンドは、二番目に作成したキャラクターという意味で、サブキャラとも言われる。

すぺりおるの装備を見れば、一目でこいつが上級プレイヤーのセカンドキャラだという事が解る。

今のレベル帯で装備できる最高グレードの装備品に、アクセサリーの猫耳。猫耳はけっこう高価なアイテムであるし、そもそも初心者プレイヤーはそんな所に金を使う余裕は無い。

「もしかしてあんた、スペリオルか？」

オレは思い切って聞いてみた。

「ありゃ？　なーんで俺の事知ってんの？　メインで会ったっけ？」

「いや、名前を見てなんとなく……」

本人だったらしい。これは助かる。スペリオルはこのサーバーでも屈指のウォーリアである。彼女……いや、彼か。彼のプレイスキルがあれば、オレのアシストもそんなに必要ではないかもしれない。

「んーー？　プンってばかなりキャラメイクいじくったなぁ？　珍しいぞ、それ」

すぺりおるがプンの周りをちょろちょろと動き回る。そして、プンを凝視したまま呟いた。

「うん＾＾　５時間かけてこの子を産んだのです＞＜v」

カオス・クロニクルのキャラクターメイキングは自由度が高い。鼻の高さ、位置、唇の大きさ、耳の大きさ、輪郭などなど……いじりだしたらキリがない。

だから、サンプルがいくつか用意されているのだが、キャラに愛着がある奴は最初ここで大いに悩むらしい。それにしても、５時間って……オレなんか、サンプルＡの目つきと髪色いじっただけだぞ。

「ぬを。そうだったのか、プンちゃんハアハアの秘密はそこに！」

普通、５時間かける奴はいないと思うが……やはりプンは変わっている。

「それじゃ、早速『炎の祭壇』に向うか。おっと、その前にちょっ

と飲み物入れてくるよ」

「いてら＾＾」

机の端に置いてあったマグカップを手に取り、リビングへと向う。リビングのドアからは光がもれ出ていて、テレビの賑やかな音が暗い廊下に響き渡っていた。

「あら、またコーヒー？　成長期なんだから、あんまり飲んだら体に毒よ？」

ドアを開けると、母親がテーブルで家計簿を付けていた。マグカップを右手に持つオレの姿を見て、飲みすぎないよう注意をかけてくる。

「別に……あれ、お父さんは？」

「残業よ。あんたと潤の学費を稼がなくなくちゃならないんだから、頑張ってもらってるの。お母さんも来週からパートに行かないと……あんたも来年受験だから、予備校か家庭教師を付けないといけないわね。ああ～出費がかさむわ。宝くじでも当たらないかしらねー」

母親の声を背に、戸棚からインスタントコーヒーの瓶を取り出し、マグカップへとそれを入れると、その上にお湯を注ぐ。白い蒸気が立ち上りそれが鼻腔を突きぬけ、コーヒーの香りが脳を刺激する。

「学校はうまくいってるの？」

「別に……」

「お母さん、心配なのよ？　潤はたくさんお友達を連れてくるけど、あんたはいつも家でゲームばっかり。成績は下がったりしてないから、やめろとは言わないけどね。友達をつくる事も大切なのよ？　解ってるの？　まり――」

母親の話が終わる前にリビングのドアを閉めた。会話の中に出てきた潤というのは二つ年下の弟だ。

小さい頃からそうだった。父親の仕事の都合で転校を繰り返し、長い付き合いの友達が出来たことは無い。弟は正反対で、すぐに誰とでも仲良くなれる性分らしい。

確かに、現実には……リアルには友達が少ないけど、ネットには……どんなに距離が離れていても、場所が変わろうとも、何でも話せる仲のいい友達がたくさん『いた』。

そうだ。1年前までは……こんな風に打算で物を考えるズルい人間じゃなかった気がする。プンのような初心者とたくさん狩りに出かけてすぐに仲良くなって……。

でも……。

また作れるだろうか？　新しい場所で……新しい仲間を。

脱ぎ散らかした制服と、今日の授業で使った教科書。ゴミ箱をひっくり返したような床。そんな地獄絵図のような部屋の中で、そこだけは輝いていた。

机のイスを引いて、腰を落ち着かせると淹れ立てのコーヒーを口に含み、カオス・クロニクルの世界へと戻る。

「ただいま」

「エルくんおかー＾＾」

「ぬを。中尉、おかえり」

「おかえりぃ」

待っていてくれた。昨日今日出会ったばかりの3人は、確かにそこにいて、オレの事を待っていた。

「行こう、炎の祭壇へ」

エルトは歩き出す。その背中を追うように3人が付いてくる。いつかまた……1年前のようにオレはこいつらと仲良くなれるのだろうか？

狩り場はみんなのもの

村のテレポーターまで歩いて、そこから一気に炎の祭壇へとテレポートする。

炎の祭壇は３０代前半の狩り場だ。けっこう格上のＭＯＢがうろちょろしているが、今日はエンチャンターもいるし、ＨＰ管理はオレが一手に引き受けるので、全滅することは無いだろう。

ちなみに、ＭＯＢと９レベル以上の差があるので、オレには経験値が入らない。だから、あえてそれを利用してオレもパーティーに入っている。こうすれば、オレが経験値をムダに吸ってしまうこともないし、パーティーメンバー全体に効果が及ぶ『グループヒールライト』が使える。逐一メンバーのコンディションが確認できるというのも大きな利点である。

めらめらと燃え盛る炎の沼。辺り一体は炎以外に何もなく、火属性のＭＯＢがうじゃうじゃと沸いている。中央の祭壇……単なる岩山にはしごをかけた程度の物だが、そこにエリアボス『フレイムガイスト』が待ち構えている。

このメンツでは心許ないので討伐はしない。

カオス・クロニクルは最大で６人までパーティーを組める。基本的には、ナイト、ヒーラー、エンチャンター＋それ以外の職３人という構成がスタンダードだ。討伐するにしても、もう一人くらい欲しい。

それに、種族ボーナスも考えると、エルフとダークエルフがいれ

ば文句がないのだが……。

種族ボーナスについて説明すると、各種族ごとにパーティーを組んだとき、メンバーに強化魔法が適用されるのだ。種族それぞれに固有のボーナスがあるのだが、６種族それぞれがバラバラに参加していれば６種のボーナスが得られるわけだ。

とはいえ、一人でもプンの狩り友候補が来てくれたのでこれ以上の文句は言えないか。

「さて……プンのためにも少しパーティーらしく狩りをしてみるかな。ヤマモトはＴＬ。プンはＦＡ。オレは状況に応じてスリープとヒールを。すぺりおるは臨機応変に攻撃」

「ぬを。ＴＬか、了解！」

「あいよー」

「@@？」

ヤマモトとすぺりおるはすぐさま理解してくれたが、プンだけはまったくわかりませんオーラを放出していた。

「プン、ＴＬっていうのはターゲットリーダー。それぞれがバラバラにＭＯＢを攻撃したら効率が悪いだろ？　だから誰のターゲットに合わせるかを決めておくんだ」

ＴＬは非常に重要な役柄でもある。優先して倒すべきＭＯＢを選定するのもそうだが、ナイトのヘイトからもれたＭＯＢや、予期せぬＭＯＢとのリンク時に適切な判断が必要になる。

もう一つの意味として、トークリーダーというのもあったりするのだが……これもまた、重要だ。パーティー内のチャットを盛り上げ狩りを退屈にしない。これは誰にでもできることではないが。

「ＦＡは、ファーストアタック。要するにＭＯＢを最初に攻撃するプレイヤーだな。これは性質上ナイトの役割だ。ＭＯＢへの攻撃を優先して繰り出し、ヘイトスキルを使って敵対心をあおる。そうすればＭＯＢの攻撃はお前に集中する……大丈夫。お前のＨＰは常にオレが見ているし、危ないと思ったら即リターンする。損な役割かもしれないけど、これができればお前は立派なナイトだよ」

「うーん、わかんないよお；；」

「そうだな……簡単に言えば、ヤマモトのターゲットしているＭＯＢにヘイトをかける。それを倒したらまたヤマモトのターゲットしたＭＯＢにヘイト。その繰り返しになるな」

「わかった！　ヤマちゃんに合わせればいいんだね！　それならおバカなプンでもできちゃうｗ＞＜ｗ」

「そうか。それじゃ早速始めよう」

「；；」

「なんだ、プン？」

「プンはおバカじゃないよ＾＾　っていうフォロー待ってるのに、どうして誰もそう言ってくれないの！」

しばらく皆沈黙して。

「プンはおバカじゃないよ^^　これで、いいのか？」

素っ気無くそうタイピングしてみた。

「心がこもってないよ@@;」

「お前はアホか。初心者なんて皆最初は解らない事だらけさ。やってる内になれりゃいいんだ。オレだって最初はそうだったんだし、気にするな」

「そうそう！　ぼくちんなんか、最初ダークエルフのおねーさまのお尻ばっかり見てたら、今度はエルフのおにゃのこの生足に目が行って、ドワ娘のツインテールでうっとりしてたら、いつの間にかパーティー追い出されてたよ！　プンちゃんはハアハア指数が半端ないから、いっぱい失敗しても大丈夫！　初心者さんにはよくあることだよん！」

「ヤマモト」

「ぬを。中尉、何か？」

「お前がミスったら即追放する」

「ひどす！」

ひどくないだろう。ここまでエロバカいとは、想像できなかったが。……男キャラでよかった。そんな風に見られてたらと思うとゾっとする。

「じゃあ、プンも注意しなきゃ。エルくんの横顔にうっとりしてる暇はなさそう。。」

男キャラでも、見られることは見られるらしい……。

「……そろそろ始めねぇ？　俺もう、プンのスカートの中のぞくの飽きたよ」

のぞくなよ。

とりあえず狩り場での諸注意を話し終えた後、オレ達はさっそく狩りをすることになった。狩りに入る前にすぺりおるが習得しているバフをかけて、戦闘力を上げスタート。

ヤマモトがファイアスピリットというザコＭＯＢにターゲットし、プンがそれをヘイトする。プンめがけて襲い掛かるＭＯＢをヤマモトが攻撃し、すぺりおるがそれの補助をする。

「ぬを。やっぱバフがあるとぜんぜん違うお！　トランザム発動したみたいだお！　キラ・ヤマモト、目標を駆逐する！」

「ヤマモトうっざ」

「ヤマモトにはヒールなしだな」

「ヤマちゃんうるさい＾＾」

「ぬお。これなんてイジメΣ（。д。）；」

順調にＭＯＢを倒していく。初めはミスを重ねていたプンだったが、次第に慣れていき、今では攻撃しながらチャットできるくらい余裕が生まれていた。いい感じだ。

プンは成長している。チャットの速さもだが、順調にレベルも上がっているし、自分の立ち位置をちゃんと理解できるようになった。昨日今日でここまで成長しているのを見ると、付き合った甲斐もあるというものだ。

……やればできる子なんだな。

とはいえ、プンはフェイブナイトだ。気を抜けば一瞬で瀕死状態になってしまうので非常にヒヤヒヤさせられる。常にＨＰゲージが４分の３以上ある状態をキープしておかなくてはならない。

狩り始めて、２０分ほどした時……それは唐突に起った。

プンがヤマモトのターゲットしたＭＯＢにヘイトをかける。ＭＯＢがこちらにやってきて、いきなり倒れた。まだ、攻撃していないはずなのに。

「はりゃ？」

「ぬを。プンちゃん攻撃した??」

「ううん、してないよー？」

倒れたＭＯＢをよく見ると、矢が３本刺さっている。カメラを回して周囲を見渡すと、炎の向こう側に３つの人影があった。

「横殴り……か？」

オレが呟いてすぐ、３つの人影がこちらにやってくる。それは、３人のエルフの女性だった。３人とも同じ装備、同じ髪型、同じ顔である。ただし、髪色だけは違っている。

「げぇ。肉屋だ。うっぜ。ここ、あいつのナワバリだったんかぁ」

「すぺりおるちゃん、お肉屋さんなんてどこにもないよ@@？」

「プン。あいつらの名前見てみろ」

「えっと。豚肉５００ｇ、牛肉５００ｇ、鶏肉５００ｇ……？」

『肉屋』はエルフアーチャー３人の事を指している。豚肉５００ｇ、牛肉５００ｇ、鶏肉５００ｇという３キャラではあるが、あれを操作しているのはたった一人の人間なのだ。

３ＰＣ……３つのＰＣでマクロを駆使して同時に３キャラクターを操作する風変わりなプレイヤーで、キャラの名前から『肉屋』と呼ばれるようになった。

しかも、この肉屋。狩りのマナーがすこぶる悪い。一旦狩り場に引きこもると、５時間はずっと独占していて他のプレイヤーが近づこうものなら、周囲のＭＯＢを全て乱獲してまで独占しようとする。

一般プレイヤーからは嫌われている存在だ。その肉屋がここにいる……ということは、この狩り場もあいつに独占されてしまうだろう。

「ここ、使ってます」

真ん中の金髪のエルフ……おそらく、これがメインとしているキャラなのだろう、豚肉５００ｇがそう言うやいなや、オレに向って矢を放った。

矢がものすごい勢いでオレに迫り――命中する。

しかし、矢がオレをすり抜けて、真後ろに出現したＭＯＢに命中した。

「邪魔」

「ぬを。いくら金髪エルフぺったんこ生足ステキっ子でも許せん。お前にはハアハアせんぞ！」

「ヤマモト、後ろにすっこんでバナナでも食ってろ。豚肉５００ｇさん。ここはオレ達が２０分以上前から狩りをしていたんです。狩場はみんなの物でしょう？　みんなで譲りあって――」

オレのセリフが終わるまでに、周囲はＭＯＢの死体でいっぱいになっていた。なおも３人のエルフは弓を引き、矢を放つ。

「だから？」

こいつは人の話を聞くつもりなどないらしい。

……どうするか。

リアルのオレとエルト

「場所を変えよう。もう少し奥にいけば、弓矢に耐性のあるＭＯＢがいたはずだ。いくら肉屋でもそれは狙わないだろう。せっかくここに来たんだ、あいつに何を言われようとオレ達はここで狩る。嫌な思いをした奴もいるかもしれないけど、我慢してくれ……ＰＶＰなんてこと、したくはないし」

「いや～しょうがないんじゃねぇ？　肉屋は何を言ってもムダだから絶対ここどかねーよ。それより、むしろ弓矢耐性のＭＯＢをあいつの目の前で狩りまくってやろーぜ。その方が楽しいわｗ」

すぺりおるはそう言って、一足先に炎の奥へと消えて行った。

「ぼくちんは、中尉の言う事に従いますお。確かにあの人はちょっちムカつくけど、生足がステキだからこれ以上はなーんも言えませんな。は！？　あの危なっかしい走り方のすぺりおるたん……ハアハア。ぬを。けれどすぺりおるたん、中身男……うう。ぼくちんはどうすれば……」

ヤマモトは結局ハアハア言いながらすぺりおるの後を追っていった。何でもいいのかあいつは。

「プン。奥に行こう。ここよりちょっと強いけど、邪魔されるよりマシだ」

「何で」

「ん？」

「何でみんな仲良く一緒に狩れないのかな～＞＜　みんなで狩ったほうが絶対楽しいのに。。」

「そうだな。でも、それぞれ事情があるんだよ。一人で狩りたい奴だっているし、時間がないから他人に付き合ってる暇もないのかもしれない」

オレも他人の事は言えないが……。

プンはまだ納得していない様子だが、オレが歩き出すとプンも離れまいとすぐさま後を追ってきた。

場所を変えて、再度すぺりおるのバフを受けて狩りを始める。ＭＯＢの攻撃が少し激しくなったが、狩れないほどのことじゃない。

遠くから矢を放つ音がひっきりなしに聞こえてくるので、肉屋の乱獲は健在のようだ。だが、目論見通りこのあたりは弓矢が通じないＭＯＢいるので、近くには寄ってこない。

正直、『邪魔』と言われたときにはカチンと来たが、熱くならなくてよかったと思う。今のオレは一人じゃない。不本意ながら……プンのお世話係りでもある。

そのプンと狩り友となってくれるかもしれない、すぺりおるの前で問題を起こすのは得策じゃない。すぺりおる本人も憤慨していたが、彼はあれでいてギルドのマスターだ。

後々に問題になるような事を起こしてはならない。ギルドマスターはギルドの顔だから、その下にいるギルメンにまで迷惑をかけて

しまうことになる。

ギルドマスターはギルメンの事を第一に考えなければいけないんだ。ギルメンは仲間であって家族同然なんだから……。

だから、これはプンを思っての行動ではない。すぺりおるとプンの関係を円滑に深めてもらうための措置だ。

それは回りまわってオレのためである。こいつがレベル４０になればそれまでだ。

「ぬを。プンちゃんレベルアップおめえええ！　いくつになったの？」

「ありがとー！　２８になっちゃった！　えへｖ＾＾ｖ」

あと１２レベル……意外とその日は近いのかもしれない。そうなれば、目的のアイテムを得て、プンとお別れだ。このまま順調に育てば、あるいは椛並みに化けるかもしれないな。

「ぎゃーーー＞＜　間違えてエリアボスさんにヘイトしちゃったああ@@；；　エルくん助けてえええ」

「お前はアホか。なんでよりによってエリアボスにヘイトした！　少し見直したオレの感傷に浸った時間を返せ！」

前言撤回だ。こいつが椛並みに化けるなんてありえない。あいつは冷静で努力家なんだ。こんなに天然ボケてない。

「全員オレの周りに集まれ！　リターンを発動させる」

「ぬを。フレイムガイストたんがハアハア言ってるお！　ぎゃーす！　一撃でぼくちん、死んだ（（。д。））　ぱねえっす！」

ヤマモトの尊い犠牲のお陰でオレ達は無事にリターンでミロンに帰還することができた。

「ヤマちゃん、ごめんよー；；；」

村の広場でヤマモトが大の字になって倒れている。死体ごと村中に転送されたようだ。それを見つけたプンがすぐさまヤマモトに駆けつけた。

「ぬを。プンちゃん、もっとこっちへカモンです。そーそー。あ、もうちょっと右。あ、いきすぎ……半歩左へ」

「このへん＾＾？」

「ばっちぐー！　このアングル。マジで神です！　さっそくスクリーンショットにとって寝る前にハアハアを」

すぐにリザレクションをかけてヤマモトを蘇生させた。

「ぬを。まだ保存してないのに！　中尉、男のロマンを何とするのですか！」

「黙れド変態」

「そんな事言って～。中尉だってほんとは興味あるんでしょお？男子にとって、女子のスカートの下はまさに聖域！　シャングリラ

！　ユートピア！　ア・バオア・クー！」

「オレ、女に興味は無いから」

「な、なんですと！？　まさか、中尉は……」

「ああ。オレ、リアル１７歳の女子高生なんだ」

「えええええええええええ！？」

「って言ったら面白いだろう？」

「な～んだ。びっくりした冗談だったのかぁ。一瞬ほんとにそうかと思ったでごわすよ。このキラ・ヤマモト修行が足りませんでした……」

「オレだって冗談くらいは言うさ。それより……プン！　エリアボスに間違ってヘイトとかお前は面白い奴だよ。一緒にいてスリリングで飽きないわ」

「えへへへへ～でしょでしょ＞＜ｖ」

「ほめてねーよ！」

「あ。エルトよーい。俺、このへんで抜けるわ。明日早いし。そろそろ寝ないと、嫁に殺される」

すぺりおるがオレ達の会話に割って入ってくる。……嫁？

「ぬを。すぺりおるたんも冗談がうまいですな～。どうせあれでし

ょ？　ディスプレイの中の嫁でそ？　ちなみにぼくちんは、姉と妹と娘とお母さんも極秘フォルダにいますお」

「いや。俺ウソつかねーし」

「ヤマモト。お前、マジきもいな」

「ヤマちゃん、見損ないました＞＜」

「な、なんですかこの空気は。ぼくちんは中尉と違って健全な男の子なのに（。д。）」

「エルくんはかっこよくて優しいからいいけど、ヤマちゃんはダメなの＞＜」

「だそうだ、ヤマモト。今日はこの辺で終わりにしよう。お前もさっさとログアウトして、極秘フォルダ開いてハアハアしとけ」

「くそお！　中尉が泣いて謝って土下座してフォルダの中身を見せてくださいと頼んできたら、見せてやるからなー＞＜　さらばじゃボケーーー！」

ヤマモトは捨てセリフを残して去っていった。ていうか、始めから見せる気があるんじゃないか。別に見たくないけど。

「ほんじゃー落ちるわな。っと。チビがくずり出した。ああ、それと！　今日、楽しかったぜ！　なんか、始めたころを思い出したよ。狩りってこんな風に楽しかったんだな。今じゃレベル上げも単なる作業だ。お前らと組めてよかったよ。また今度機会があればどっかいこーぜ！　じゃあな」

すぺりおるはソーシャルでかわいらしく一回転すると、フェードアウトして消えて行った。あとに残されたのはオレとプンだけだ。

「エルくん、ありがと＾＾」

「何が？」

「プン、また一人お友達ができたし、知らない狩り場に連れて行ってもらえた。それに、パーティーでの狩り方もお勉強になったよ！」

「そうか。それはよかった」

「プンは妄想しちゃうのです、リアルのエルくんも、きっとクールそうに見えて熱くて優しい男の子なんじゃないかって＞＜b」

「勝手に妄想するな」

「背は１９０ＣＭ以上あって、アイドルみたいにかっこいい顔で、声はちょっと低めで、特技はブラジリアン柔術@@！」

「なんだそれは」

なんでオレの特技がブラジリアン柔術なのかも突っ込みたい。

「いつかね。リアルでエルくんに会えるといいな＾＾」

「オフ会がしたいのか？」

「うん@@ｗ　ヤマちゃんも、すぺりおるちゃんも呼んでみんなで

お話するの！」

「オレはパス。そういうのに興味ないから」

リアルを持ち出すな。ゲームはゲームだ。ここでのオレはエルトであって、リアルのオレは関係ない。

「うーん、そっか；；　じゃあしょうがないね。それじゃプンも落ちるね！　宿題まだなんだった@o@　数学は苦手ナンデス……」

「数学はオレも苦手だな。英語とか古文なら教えてあげれるかもだけど」

「エルくんも文系かー。でもプンは英語まったく苦手です！　昔の日本の偉い人に、プンが生まれまで鎖国しとけ@@！　と言ってやりたいくらいなの；；」

「無茶を言うな」

「あは。それじゃ、プンも落ちるねーお休み、エルくんｚｚｚ」

「ああ、お休み」

目の前でプンがログアウトしたのを確認し、オレもまたログアウトしてＰＣの電源を切った。

ボーナスチャンス到来！？

「オフ会……ね」

自室の学習机のイスに体重を預け、電源が切れたＰＣを見つめる。真っ暗な液晶画面には何も映し出されていない。それは、リアルのオレの瞳も同じ。

１年前のあれ以来、他人に対してまったく興味がなくなってしまった。けれど、無愛想な顔をして他人を避けていたら、周囲に敵を作りかねない。

だから、作り笑いをして、浅く付き合って本心は決して見せないようにしている。深い所まで踏み込まれたくない。母親が言ったような、友達を家に連れてくるなんて事は未来永劫ないだろう。

それに、こんな部屋見たらみんなドン引きするだろうし。

ふと、プンの言葉を思い出す。

『リアルでエルくんに会えるといいな＾＾』

ゲームの中のオレとリアルのオレでは違いすぎる。プンはきっと幻滅するだろうな。だから、会わないほうがいい。

カオス・クロニクルの世界では、容姿をいくらでも美しく設定することが可能だ。だから、そこにリアルの自分の容姿の美醜は関係ない。

ありのままのそいつの姿が……心が浮き彫りになる。文字とわずかなソーシャルとアクションだけで、そいつの本性を知ることが出来るんだ。

一体オレの何がいいと言うんだろうか？　オレは偽善者なんだぞ、プン。

空になったマグカップを片手に、部屋のドアを開けると就寝前のコーヒーを飲むためリビングへと降りていった。

＊＊＊＊＊

今日も眠い。俺は必死になってあくびをかみ殺しながら、駅の改札をすり抜け学校へと向っていた。

俺の周りには、詰襟の学生服に身を包んだ少年や、黒い生地に白い刺繍のセーラー服に身を包んだ同い年くらいの少女達。

俺の通っている高校の生徒達だ。女子の制服はシンプルだが、胸の白いリボンが大きなチャームポイントで、近所の大きなお友達の間でも人気のある一品だ。シンプルなところがいいらしい。

いや、これは稲田から仕入れた情報だが。

駅から高校までは歩いて２０分ほどもかかる。その行程も半分以上を終え、学校を視界の端に捉えた時、石鹸のいい香りがした。

俺には解る。彼女だ。

「相羽さん！　おはよう」

振り返って昨日の夜一生懸命練習した、対相羽　真理奈専用挨拶を爽やかなポーズで決めて、白い歯をキラリと輝かせた。――はず。

「あ、ちょっと待ってよ！」

無視されてしまった。

さては、照れているのか相羽　真理奈！？　ふはは。そうだろうそうだろう。３時間かけて編み出した俺の最終奥義である。これが直撃して無事な女子はいないはず！

「あの……相羽さん？？」

歩く速度が早い。もしや、予想以上の破壊力だったか？

俺も速度を上げて彼女の横に並んで歩く。と、ようやくこちらを振り返ってくれた。

「誰……？」

「へ？」

「私、急いでますので」

「ええ？　ちょっと待って、俺だよ、同じクラスで隣の席の、渡辺だよ！」

「……ああ！　渡辺くん。ごめんね、私。寝ぼけてたみたい」

普通に俺の事を忘れていたみたいだ。軽くショックである。けれど、その爽やかな笑顔で俺の心は一瞬で満たされる。

真新しいセーラー服に身を包んだ彼女の姿は、さながら女神のようだ。太陽の光を受け、神々しさすら感じる。

油断してしまったせいか、大きなあくびが一つ俺の口から出てしまった。やばい。今の俺はすごく不細工な顔だっただろう。

「……寝不足なの？」

「あ！　う、うん。ちょっと夜遅くまでゲームやってて！　カオス・クロニクルっていうネトゲなんだけど……」

「カオス・クロニクル？」

一瞬で相羽さんの目が大きく見開かれる。相当驚いた様子だ。驚いた顔もカワイイ。この表情はレアかもしれないな。

「あれ？　もしかして、相羽さん知ってるの？　昔は人気あったみたいだけど、今はもうマイナーもいいとこなんだよね」

「あ、ううん。前の学校でプレイしている人がいたから……渡辺くん。カオス・クロニクルやってるんだ……長いの？」

「んー。まだ1年くらいかな？　初めてプレイした時、ぜんぜん操作が解らなかったんだけど、カインっていう親切な人が色々教えてくれたんだ。まるで兄貴みたいな人だったよ。でっかいギルドのマ

スターもやっててさ、何だっけ？　えっと灰色の狼？　すっごく強くて、かっこよくて……憧れたなあ」

「カインが……教えた……そう。そう……なんだ」

「相羽さんもやってみない？　俺がめいっぱいサポートするからさ。きっと楽しいよ？」

これはチャンスだ。相羽さんと接点が出来た。カオス・クロニクルを一緒にプレイして、相羽さんとの思い出を積み重ねていく……学校以外で彼女と過ごす時間を作れる。

「ごめんなさい。私、パソコン苦手なの。だから……」

「あ。ああ、そっか。残念だなあ。でも、もし気が変わったら教えてよ。いつでも育成手伝うからさ！」

「うん。ありがとうね、渡辺くん」

残念だ。相羽さんをエルフのヒーラーにして、ヒールしてもらえたり、ドワ娘のエンチャンターにして、バフをかけてもらったり、ダークエルフのナイトにして、守ってもらいたいという、一瞬の妄想が盛大に弾けとんだ。

「私、先に行くね」

相羽さんはさっと駆けて行く。学校の昇降口に入って、下駄箱から上靴を履き替える姿に見とれてしまう。相羽さんのスカート丈はけっこう短い。他の女子に比べるとまだ長いほうだが……。

履き替えるその瞬間にかがみこむ姿勢になって、黒いプリーツスカートから、かぶりつきたくなるような、艶のある白い太ももが露になった。

俺はたまらず息を飲んだ。これは、まさか。

ボーナスチャンス！？

あ！　あとちょっと！　もう少し、そうだ。そのまま……。

「ナ～ベ～！　よ、おはようさん！」

俺の願いは叶うことなく、代わりに稲田のダミ声と、メガネのフレームが視界に入り込んできた。

「あん！？」

「な、なんだよ何でそんな怖い顔で睨んでんの？　俺、お前に何かした？？」

「お前は全世界の夢見る青少年の敵だ」

稲田の顔を無理矢理どけると、そこにはすでに相羽さんの姿はなかった。

駅前で発生したイベント

今日も相羽さんの周りにはいつも誰かがいて、賑やかな渦を形作っていた。

俺が付け入る隙なんてまったくない。授業中ちらちらと隣を盗み見る程度で、話しかけるタイミングが中々みつからない。

カオス・クロニクルを一緒にプレイできれば、学校で話しかけられなくても別に気にする必要はないけど……。しつこく誘ったら嫌われちゃうし。

……何か接点が欲しいな。

そんなことをずっと思案していたら、いつのまにか火曜日の授業が全て終わっていた。

「相羽さーん。一緒に帰ろ～」

女子グループのリーダーが、カバンに教科書をしまい終った相羽さんに話しかけた。

「……ごめんなさい。今日は、家の用事で早く帰らないといけないの」

「そうなんだ～。じゃ、また明日ね！」

「ごめんなさい」

相羽さんはそう言うと、カバンをつかんで足早に教室を去って行った。転校してまだ間もないから、まだまだ忙しいんだろうな。

話しかけた女子も同じように思ったらしく、相羽さんを引きとめる事はしなかった。

……俺も帰るかな。確か今日は漫画の発売日だ。駅前の本屋に寄って帰るか。

学校を出ると、朝通った通学路を遡って駅へと向う。

駅前は本屋やスーパー、銀行や飲食店が立ち並び、夕方にもなれば人でごった返している。目的の品を手に入れるべく、大型チェーン店の本屋へと足を踏み入れた。

無事に目当ての物を購入して、駅へと向おうとした時だ。本屋のすぐ入り口で大きな袋を抱えた女の子がうずくまっていた。白い長袖のTシャツにジーンズ姿の、中学1，2年生くらいのかわいらしい子だ。

袋の中身は大量のインスタントコーヒーで、駅前のスーパーの袋にそれがはちきれんばかりに押し込まれている。

あれだけの量を女の子が運ぶのは、きついだろうな。けれど、ちょうど電車が来るいい時間だ。これを逃がすとちょっと待たなければならない。

俺は心の中で彼女に手を合わせて、目を合わせないように過ぎ去ろうとした。

一生懸命に袋を両手で抱えようと立ち上がる彼女。ふと、その横顔が視界に入って俺は足を止めた。

その横顔に見覚えがある。つい最近、どこかで会ったような気がする。そんな考えを巡らせていると、目の前でインスタントコーヒーの瓶が大量にばら撒かれた。

「あ！　ご、ごめんなさい！　おケガはありませんか？」

「ああ。大丈夫。ほら、これ。あ、こっちにも」

「あ、ありがとうございます。お優しいんですね」

コーヒーの瓶をつかんだ白く細い腕をたどっていくと、気の弱そうな瞳と目が合った。黒い髪は男の子のように短く切りそろえられており、その下の顔はドワ娘のような愛らしさがあって、きゅっときつく結ばれた唇が緊張をあらわしていた。

瞳は潤んでいて、今にも泣き出しそうな感じである。

「すごい量のコーヒーだね。これ、全部君の？」

「いえ、お姉ちゃんのです。ぼく、コーヒーは苦くて飲めないから……ごめんなさい」

何故か謝られた。

「いや、それよりこんな大量のコーヒーを妹一人に買いに行かせるなんて、鬼みたいな姉貴だな！　俺だったらそんな姉貴にソバット入れるね！」

「や、やめてください！　お姉ちゃんは何も悪くないんです。ぼくがいつも、ドジで泣き虫だから……ごめんなさい」

また謝られた。

なんだか見ていてかわいそうになった。しょうがない。乗りかかった船だ。どうせ帰ってやることといったら、ゲームくらいだし、たまにはボランティアも悪くないだろ。

「君、お家どこ？　よかったら――」

「やめてください！　誰か、助けて！」

「は？」

「お姉ちゃんに言われてるんです。知らないおじさんに声をかけられたら、股間を蹴り潰して顔面にツバ吐いて逃げろって……ぼく、ツバを吐くのはちょっと……」

どんな姉貴だ！　てか、股間を蹴るのに容赦は無いのかこの子は。

「別に怪しいもんじゃないよ（このセリフ、怪しい奴のセリフか）。この近くの高校の生徒なんだ。ほら、学生証。な？　目の前で困っている女の子がいたら助けるのは当然……」

俺、さりげにサムいな。

「ごめんなさい！」

「いや、だから謝らなくてもいいって。体力には自信があるし」

「あの、そうじゃなくて……ぼく、男……です」

電撃が俺の体中を駆け巡った。この子は一体何を言っているのだろうか、一瞬思考が停止する。

「え？　オトコ？　ああ、音子とかいう名前？」

「ぼくの名前、潤です！　音子じゃありません！」

きょうだい

潤は、小さな肩を震わせ頬を赤く染めて叫んだ。それに驚いた周囲の人々が何事かと振り向き、俺は冷たい視線の集中砲火を受ける。

潤の瞳はすでに決壊寸前のダムのようになっていて、今にも泣き出しそうだ。

「あ、えーと。潤。その、気に障ったなら謝るよ。ごめん。その、純粋に助けたいだけなんだ。その、重そうだったから」

「ごめんなさい。取り乱してしまいました。お姉ちゃんにもよく言われるんです。『あんたは男らしくない』って……毎日……だから、ごめんなさい」

「いや、そんなに謝らなくても……とにかくさ。半分持ってあげるよ。俺、目の前で誰かが困っていたらほっとけないんだ。だからさ、手伝わせてくれよ」

潤は、まるで信じられない物を見るような目で、俺の顔をじっと見つめる。背は俺よりも１０ｃｍは低い。上目づかいで見つめられている形なっているわけだが……。

やはりこの子の顔……どこかで見覚えがある？　けれど、潤に出会ったのは今日が初めてだ。最近出会った誰かに似ている……だめだな、答えが出てこない。

頭の引き出しを一生懸命ほじくり返していると、潤が少しはにかんだ様子でぼそぼそとしゃべりだした。

「あの……じゃあ、お願いします。本当はぼく、少し困っていたんです。ごめんなさい」

『ごめんなさい』というのが口癖になってしまっているのか、潤の口からは何度も『ごめんなさい』が連呼されている。

「じゃあ、俺こっち持つよ。で、家はどっち？」

「あの、三丁目です。ここからだと１０分くらい歩いた所になりますね。付いてきてください」

潤はそう言うと、俺に背中を向けて高校の方向に歩き出した。すると、みるみる小さな背中が遠ざかっていく。

「って歩くの早いな。ちょっと待ってくれ、潤」

速度を上げて潤に追いつくと、横に並んで一緒に歩き出す。

「それにしても……ほんとすごい量のコーヒーだな。これを1人で飲むのか、君のおねーさまは」

「お姉ちゃん、コーヒー大好きなんです。お砂糖も、ミルクも入れずに飲んじゃうんですよ。すごいです。それにしても、この街に親切な人がいて本当に良かった。越してきてまだそんなに時間が経ってないから、知り合いも少ないんです」

「そうなんだ？　じゃあ、このへんはまだあんまり詳しくないのか」

「はい。だから、本当は声をかけてくださった時、すっごく嬉しか

ったんです。でも、誰にも迷惑をかけたくなくて……」

「気にするなよ。俺でよければいくらでも声をかけてくれ。困っていることがあるなら、力になるぜ？」

「ありがとうございます！　よかった……いい人に知り合えて。あ、そういえば……まだお名前聞いてませんでした。ごめんなさい」

そういえば、まだ名乗ってなかったな。

「ああ。渡辺　翔っていうんだ」

「渡辺さんですね。本当にありがとうございます。けど……どうしてそんなに親切にしてくれるんですか？」

「ん？　んー。ゲームでさ。ものすごく親切にしてくれた人がいたんだよ。それまでの俺って、別段他人に興味が無くてさ。目の前で誰が転げようが、ケガをしようが見て見ぬフリをする人間味のない奴だったんだ。そんな俺に、１から１０までそのゲームの事を手取り足取り教えてくれて……勉強も教えてくれたっけ。とにかく、誰にでも優しくって、強い人がいてさ。憧れたんだ。俺もあんな風になりたいって」

「そうなんですか」

「けれど、ある日……その人は俺の目の前から突然姿を消した。後で聞いた話じゃ、初心者の相手をしている時に何かあったらしくて……しかも、それが原因で自分の作ったギルドからも追い出されて、仲間からも色々言われたらしくてね……。俺は、そのことを知らなかったとはいえ、力になれなかったんだ。あれだけ世話になったの

に……だからさ。目の前で困っている人は助けてあげようって思うようになった。ゲームの中でも、リアルでもね」

カインは、多くの事を俺に教えてくれた。だから……俺もカインのように優しくなりたいと思った。だから、相羽さんがカオス・クロニクルをプレイするのであれば、カインがしてくれたように接してあげたい。

「すごい人ですね。渡辺さんって」

潤が瞳をうるうると輝かせながら、感動していた。

「いや、すごいっていうのならあの人だよ。いつかリアルで会えたらなって、ずっと思ってたけど……ＭＭＯだからな。きっと色々あるんだ」

「そうなんですか……それ、なんていうゲームなんですか？　ぼくもやってみたくなりました。渡辺さんのやっているゲーム！」

「カオス・クロニクルだよ。基本料金は無料だから、ＰＣとネットの環境さえあれば、大丈夫」

動作するために必要なスペックもあるが、細かく話すと長くなってしまうので、この場は置いておこう。

「それ、知ってます！　うちのお姉ちゃんも昔やってました。今はどうかわからないけど……」

「そっかー。じゃあ、潤のねーちゃんとどこかであってるかもしないな、俺。世間って狭いね」

「あ、でも。ぼくＰＣ音痴なんです。お姉ちゃんはすっごく詳しいんですけど、カオス・クロニクルの話に触れると怖くって……」

「持っているのはノート？」

「はい」

「それなら、今度俺がセットアップしてあげるよ。家にはクライアントデータの入ったＣＤＲＯＭがあるし」

ちなみに、カオス・クロニクルのゲーム本体は公式ホームページから無料でダウンロードできる。

「本当ですか！？　じゃあ、明日行ってもいいですか？」

「明日か……いいよ。水曜は５時間目で終わるし、駅前で待ち合わせしようか？」

「はい。じゃあ、ぼくの携帯のメルアド教えておきますね」

潤はそう言うと、コーヒーの袋を地面に置いてポケットから携帯を取り出した。

俺も胸ポケットから携帯を取り出し、赤外線通信で番号を交換する。

「これでよし。じゃあ、明日はＰＣ持って駅前に……そうだな。３時でいいかな。着いたらメールいれるからね」

「はい。本当にありがとうございます、渡辺さん。あ、ぼくの家すぐそこなんで、ここまでいいです！」

俺は持っていた袋を潤の左手に握らせた。

「潤はたいへんだな。俺は長男で下に妹がいるから、姉貴がいる奴の気持ちはわからないけど、苦労しそうだ」

「そんなことないですよ。確かにお姉ちゃん、普段は怖いけど優しい時もあるし、両親がいない時はご飯も作ってくれるんです。それに……たった一人のお姉ちゃんですから。だから、大事にしないと」

「今の言葉……家の妹のアホにも聞かせてやりたい！　あいつ、俺に蹴りいれるわ。家族共用のＰＣに入れといたエロ画像を全部削除するわ。トイレに忘れたエロ本を、俺の部屋でキャンプファイヤーするわ……妹の風上にもおけん奴なんだ！」

「えっと……それはたいへんですね」

俺の２つ年下の妹……名を愛紗（あいさ）という。とにもかくにも生意気で、兄妹仲は基本的に悪い。潤の性格を少しは見習ってもらいたいものである。ていうか、潤みたいな弟が欲しかった。今から両親に頼んでも、もう頑張れないから無理だろうけど。

「それじゃあな、潤。色々がんばれよ」

「はい、色々がんばります。さようなら、渡辺さん！」

潤の後姿が住宅街の角で消えて、俺も歩き出す。しばらく駅までの道を歩いていたが、ふと思い出して携帯の電話帳をチェックして

みた。

潤の番号などを一応確認しておこう。電話帳を開いてすぐに潤の名前が見つかった。フルネームで登録しているらしく、あ行のトップにその名前があったからだ。

「相羽　潤……。相羽？　相羽さんと同じ名字か……偶然か？」

ザ・ヤマモトセカンド

いや、まて……そういえば、潤は姉がいると言っていた。相羽という名字は珍しいと思う。それに、今になって考えれば潤の横顔が誰に似ているかだなんて、すごく簡単な事だ。

相羽　真理奈。彼女は潤の姉なのだ。そして、またまた潤の話通りであれば、カオス・クロニクルをプレイしていたという……けれど、朝会ったときはプレイしていないと言った。

『カオス・クロニクルの話に触れると怖くって』という潤の言葉。もしかしたら、何かあったのかもしれない。けど、何が？　解らない……。

そういえば、朝、カインの話題になった時……視線が鋭くなった。あれは気のせいなんかじゃない。まるで別人のような……。

相羽さんは……カインのリアルの知り合いなのか？　もしくは、俺と同じようにカインに世話になった初心者の一人かもしれない。

聞きたい。そう思った。もし、カインの事を知っているなら……カインに会ってみたい。今どこでどうしているのか、今のカオス・クロニクルの状況を伝えたい。

カインが戻ってくれば、きっと前のような活気に満ちて……俺も、灰色の狼に戻れるかもしれない。そしてもう一度、カインと一緒に冒険がしたい。あの頃みたいに……。

とはいえ、この話題は彼女の前ではタブーらしい。普通に聞き出

すのは無理だな……どうするか。

俺は駅の改札を通ると、ホームで電車を待ち続けながら色々なことに思いを馳せていた。

＊＊＊＊＊

椛。フェイブナイトで現サーバー最強のナイト。彼に出会ったのは1年近く前……。

今のプンのように装備がめちゃくちゃで、ＴＬとは違うＭＯＢを攻撃したり、ダンジョンで迷子になって狩り開始の時間が３０分も遅れたことがあった。

でも、真面目な奴で教えた事はすぐに覚えるし、ときおり言う冗談もなかなか笑えるし、優しい奴だった。

聞けば、オレと同い年で高校生らしく、何度か勉強を教えたことがある。ちなみにあいつの椛という名前は、好物のもみじまんじゅうからとってきたらしい。

漢字一文字でとってもカッコイイ名前だと思ってたのに、ちょっとがっかりした記憶もある。

いつからかな。椛が隣にいるのが当たり前になったのは。ログインするとあいつがいて、ギルドメンバー数人を引き連れギルドハント……ギルメンのみで構成されたパーティーで狩りをしたものだ。

椛と話したい。あいつはいつもオレの味方だったから……新しい生活に、新しい家に、新しい繋がり……正直、かなり戸惑っている。椛と話して……でも、今のはオレは『エルト』なのだ。椛の知っているオレではない。だから、無理なんだ。けれど……。

「エルくん。こんばんわんわん（^▽^）ノ」

いつの間にかプンがログインして、オレの目の前に立っていた。

「ああ、プンか。相変わらずだな」

「プンは相変らず元気だよ〜〜^^v　プンから元気取ったら何も残らないもん！」

プンはぐるぐるとオレの周りを、鎖から解き放たれた犬のように走り回る。ちなみにここは、ミロンの村を一歩出た所だ。

「そうだな」

面倒なので、適当に相槌を打っておく。

「エルくんひどい；；」

「そうだな」

「@@？　何か考え事？？」

走り回るのをやめたプンがオレの前までやってきて、顔を覗き込んできた。

「いや、別に」

「プンでよければ何でも相談にのるよ～^^　まさか@ロ@;」

「……何だよ」

「恋の悩みか～～＞w＜　こいつめぇ。プンというものがありながら～プンプンしちゃうぞ！」

「いや、違うし。オレ、恋なんてしたこともないし、興味とかないから」

これは本当の話。17歳と2ヶ月生きた今でも、恋なんてものはしたことがない。何度か告白をされた事はあるが……すべて断ってきた。

「ええ～つまんない;;」

「つまってくれ。はあ。で、ヤマモトはどこだ?」

一応オレ達はフレンド登録をしているので、それぞれがログインしているかいないかを知る事ができる。さっき確かにヤマモトがログインしていたのだが、いつのまにログアウトしたらしかった。

「わかんないー。どこいったのかな（?_?）」

ヤマモトの姿を求めてカメラを動かすと、ドワーフの少女がとことことこちらに走ってきた。ちなみに、すぺりおるではない。

ピンク色のサイドテールの髪に、体には不釣合いなほど大きな胸

……短めの黄色いスカートのようなローブをはいており、へそが見えている。トップスも黄色いシャツでそれが前述の胸によって窮屈そうなイメージである。

「エルトお兄ちゃん～」

少女はオレに向ってソーシャル抱きつくを強要してきた。無論、これを拒否する。

「誰だお前は」

「ひど～い！　私の事忘れちゃうなんて；；；」

ドワーフの少女は泣きじゃくり、プンの胸に飛び込んだ。

「よしよし、大丈夫？　エルくんのお知り合いなの？」

「うん！　ちゅ――じゃなかった。セイラ、エルトお兄ちゃんのために一生懸命尽くしてきたのに！」

「はあ？　セイラ？」

ドワーフの少女の名前を見ると、セイラ・マスオカという名前だった。こんな名前に心当たりは無い。

「セイラ、お兄ちゃんのこと大好きだよ！　だから……お小遣いちょうだい！」

「お前……さっさと失せろ」

「ぬwじゃなっくって、きゃあ！　プンお姉ちゃん、エルトお兄ちゃんが怖いー；；」

「エルくん、ひどいよー@@　この子がかわいそうだよ」

「プン、そこをどけ」

ちなみに、ヒーラーにも一つだけ攻撃魔法がある。『ライトブレッド』という名前で、威力はウィザードのそれとは遠く及ばないが、ないよりマシ程度のものだ。

オレの足元に六芒星の魔方陣が発現し、光の塊が目の前の空間から出現すると、それがセイラ・マスオカの体を貫いた。

「ちょっと、エルくん@@！？」

「ぬを。ぼくちんのＨＰが一桁に……ガクブル（（。д。））」

「ネカマごっこは楽しいか？　ヤマモト」

キレイなバラには残念なトゲがある

「フフ。バレてしまっては仕方がない。中尉の大好きなロリ巨乳を作成した、あなたの心のオアシス、キラ・ヤマモトでございます（ΦωΦ）」

「いや、ロリも巨乳も興味ないんだが」

「なんですと！？　中尉め、ぼくちんが6時間かけて作成したセイラちゃんを、お気に召さないとは……」

6時間もこれに時間割いたのか、恐ろしい奴だ。

「ヤマちゃん、気持ち悪いからさっさとキャラクターチェンジして^^」

「ぬを。気持ち悪いσ（。A。）？」

「どこにそんなバカでかい乳揺らした幼女がいる。いや、それ以上に中身がお前だという時点で吐き気がする」

「ひどす！　ちくしょうめえ；；　せっかく考えた悩殺ポーズで、中尉を昇天させてやろうと思ったのにーばかやろうーー><　むっさい緑のおっさんでハアハアいってやるからなー！　待ってろオオオオ」

セイラ・マスオカは迷惑にもシャウトで叫んで村の中に消えて行った。そして、それと入れ代わる形で本来のヤマモトがやってきた。

やってきたヤマモトは、挨拶代わりにいきなりヘンな事をしゃべりだした。

「べ、別にあんた達と冒険したいわけじゃないんだからね！？　仕方なくなんだからね！　勘違いしないでよね！？」

ツンデレのつもりなのだろうか？　面倒くさくなったので、素っ気無く返してやることにした。

「嫌ならいいよ。さようなら」

「ヤマちゃんばいばーい＾＾ノシ」

「ごめんなさい、冗談デス。中尉、プンちゃん。どうかこのキラ・ヤマモトを見捨てないでやってください；д；」

「つまらん冗談はいいから、さっさと狩りにいくぞ」

「ヤマちゃんのこと大好きだから、見捨てるわけないよー＾＾」

「ぬを。ふふ、プンちゃん。ようやくぼくちんの魅力に気が付きましたか！　見よこの筋肉。フフ。さあ、おいでプンちゃん」

「昨日炎の祭壇で戦った、フレイムゾンビさんよりも、ちょっぴりかっこいいもん＾＾」

「ぬを。ＭＯＢと比べられた……ｏｒｚ」

フレイムゾンビとは、干からびたミイラが炎を纏っているイメージのＭＯＢである。これよりちょっぴりかっこいいと言われてはさ

すがにへこむだろう。

「いや、待て！　ちょっぴりとはいえ、かっこいいのだ！　そうだ。プンちゃんに褒められたのだ！　フフ。見たか中尉よ。プンちゃんはぼくちんにゾッコンなのだぞ！」

「でも、エルくんのほうが１０００倍かっこいいけど（／／▽／／）キャッ」

「ｏｒｚ」

今日も騒がしい。これはこれで……悪くないのか？

二人のやりとりを気にせずにパーティーマッチを開いてみると、珍しく３０代後半の狩り場のパーティー募集があった。

「これ、ちょうどいいな。この狩り場なら、オレでもぎりぎり適正だし、プン達でもなんとかなりそうな感じだ」

「ぬを。それより中尉！　このマッチの主。ダークエルフサマナーですぞ！　ああ……褐色の肌にステキなお山……躍動感満点のヒップ……ダメージ受けたとき、興奮しちゃいそうになる悲鳴。ああ……中尉、止めてくれるな！　ぼくちんはこのダークエルフさんのところに行ってまいります（・ω・）ゞ」

「いや、どこにもダークエルフの女とは書いてないんだが……プンはどうしたい？」

すでにハアハアと臨戦態勢に入ったヤマモトはどうでもいいが、プンはどうだろうか。

「プンもかまわないよー。ダークエルフのお兄さんって、クールでバイオレンスそうでかっこいいよね（☆▽☆）」

目が星になっている……というか、どこにも男とか書いてないんだが……。

「名前は……Ｋｅｒｂｅｒｏｓ……ケルベロス？　かな。もろ男っぽい名前なんだが……」

「きっと、ステキなクールガイだよ！　残念だったね、ヤマちゃん＾＾ｗ」

「ぬを。なーんだ野郎か……しょぼーん」

３人でマッチに入ると、Ｋｅｒｂｅｒｏｓがオレ達を迎えてくれた。

「どうも＾＾　アタシ、Ｋｅｒｂｅｒｏｓですー。読み辛いし、打ち辛いからケルって呼んでね♪」

「！！　ふふ。ぼくちんの予想通り、お姉さんだった。残念でしたな、プンちゃん！」

「えー；；」

「ケルさん。サモンお願いできますか？」

「はいな＾＾　ちょっぴり待っててネ」

サマナーにはサモンメンバーという、パーティーメンバーを近くに呼び寄せるスキルがある。これを使えばすぐにメンバーが集められて、狩りの開始をスムーズに行える。

ものの2，3秒でサモンメンバーが発動し、画面が暗転する。

画面の読み込みが始まって景色が開けていくと、周りは木々が生い茂った森の中だった。

ウェルド大森林。３０代後半の狩り場で、出現するＭＯＢは主に地属性だ。木に口が生えたマンイーターなど、植物をモチーフにしたものがほとんどである。

木々の間には小さな川が流れており、水の流れる音が心を癒してくれる。昼間はうっすらと霧がたちこめており、ＭＯＢさえ出てこなければこの風景を一日中眺めていてもいいかもしれない。

「いらっしゃい＾＾」

大きな木の下に、ダークエルフの女性が一人座り込んでいた。黒い髪が腰まで伸びていて、薄布一枚を素肌に貼り付けたようなローブを身に着けている。丸みを帯びた四肢。妖艶な眼差しと艶やかな唇。まさしくダークエルフのお姉さんだ。

「女の人だー＞＜　ケルベロスっていうから男の人だと思ってましたー」

「そうよね。こんな名前だと勘違いしちゃうよね＾＾；　まぎらわしくてごめんねー」

「いえいえいえいえ！　ギャップ萌えおおいにけっこう！　ハアハア」

「ケルさん。フェイブナイトのプンとオークウォーリアのヤマモトです。二人ともまだそんなに狩りの経験がないけど、仲良くしてやってください」

「はい。解りました。アタシも先月始めたばっかりだから、そんなに変わらないと思うけど、よろしくね♪　それじゃ、こっちもダンナを紹介しちゃおうかナ」

ケルは立ち上がると、少しオレ達と距離を取ってから召喚魔法を発動した。

ケルの体が少し宙に浮いて、地面に六芒星の魔方陣が発現し、そこから炎に包まれた生ける屍……フレイムゾンビが出てきた。

「あああああん。ダーリン。愛してるぅ♪　ねえねえねえ！　見てよこの薄汚れた皮膚と、あるか無いかわからない空洞みたいな目！　足とかこれでマジで立てんの！？　ていうくらいガタガタのヨレヨレ！　やばいやばいやばいやばいー！　アンデッド最高♪　ね、逝けメンでしょ、うちのダンナ？」

オレはプンやヤマモトクラスの変人はそうはいないと思っていたが、世界は広いようだ。

『ふざけるなよ』（前書き）

あけましておめでとうございます。
今年もカオス・クロニクルをお願いします。

『ふざけるなよ』

ケルはべたべたと炎に包まれた屍にまとわりつく。その様子にオレを含め全員ドン引きしていた。

「さあさあさあ！　おっ始めるわよ、ヤロウ共！　アタシのダンナのアシストよろしくぅ♪」

ケルはそう言って、ダンナ……フレイムゾンビをＭＯＢの群れに突っ込ませた。

オレ達も遅れないようにそれに続く。プンがＭＯＢにヘイトをして、近寄ってきたところを全員で叩く流れだ。要は昨日と同じである。

プンのヘイトで引き寄せられたマンイーターに、炎に包まれたダンナの右手が直撃する。炎の打撃エフェクトが激しく鳴動し、マンイーターは瞬く間に枯れ木となって大地に還った。どうやら、クリティカルヒットが出たらしい。

ケルはフレイムゾンビこと、ダンナの勇姿に見惚れていた。相当あのアンデッドに愛着があるようだ。サマナーを選択する人間というのは、変わり者が多いという噂を思い出す。

基本的にサマナーはソロ特化の職業だ。召喚獣専用の回復魔法と強化魔法をそなえ、自分の手足として扱う。召喚獣は一緒に狩りをすることでレベルが上がり、成長ポイントを好みのステータスに振り分けることが出来る。

フレイムゾンビは攻撃力特化のＭＯＢなのだが、あの様子を見る限り、さらに攻撃力に成長ポイントを割り振っているのだろう。強化に強化を重ねたダンナの一撃は凄まじい。

それも、ヤマモトの出番がほとんどないくらいで２、３発のダンナの攻撃で次々とマンイーターの墓場ができあがっていく。

「あああああん。ダーリン。最高♪　ねえねえねえ！　見てよあの炎に包まれた手！　あんな腕に激しく抱かれたいと思わない！？　プンちゃん、エルトくん？！」

何でオレにまで振って来る……いい迷惑だ。

「けっこうです」

この人は相当変わり者だ。

「プン、冷え性だから暖かいの大歓迎です＊＾＾＊　ダンナちゃんのツルツルした頭がなんだかカワイイですね、きゃはｏ（≧▽≦）ｏ」

類は友を呼ぶんだな。

「……」

「どうした、ヤマモト？」

「ダンナさんハアハア……フレイムゾンビは生前麗しき乙女であったという公式設定が……」

ごうごうと炎を逆髪のように、ちょっとグロい頭部から噴出しているダンナが、生前麗しき乙女だと言われてもしっくりくるはずもない。しかし、ヤマモトはそこからさらに想像力をめぐらせ、その姿を脳内で補完したようだ。

こいつは、相手が女なら生きていようがアンデッドだろうが、どっちでもいいらしい。本当に何でもアリなのか。

ダンナが凄まじい勢いでＭＯＢをひねり潰して進む。正直、オレとヤマモトはやることがなかった。

プンがＭＯＢを引いて、それを一方的にダンナが倒すというもので、あまりにも単調すぎて拍子抜けする。だから、気を緩めてしまった。まさしくその『矢』先――。

「きゃあああああああああああ！　だ、ダーリンがあああ！　くおらぁぁぁあ、どこの誰じゃい！　ウチのダンナの頭に矢ぁ放ったんは！？」

凄まじいケルのシャウトがエリア一帯に響く。どうやら、ダンナが攻撃を受けたらしい。それもただのＭＯＢではないようだ。

「あ♪　でもでもぉ。頭に矢が突き刺さったダンナもステキ……」

……いいのか。

しかし……ここは植物系のＭＯＢが主体の狩り場だ。弓で攻撃してくるＭＯＢはヒューマノイド系がほとんどで、このウェルド大森林には存在しない。

「エルくん、お肉屋さんだよー、ほらあれ＾＾」

お肉屋さん……プンが動き出した先、小さな川の向こう岸には三つの人影……肉屋がいた。ダンナを攻撃したのはあいつらしい。

「ここは私の狩り場。それ以上近づくなら、ＰＫする」

一方的な肉屋の発言。……冗談じゃない。一度ならず二度までも……昨日だってキレる寸前でなんとか押しとどめたのだ。一言文句を言ってやらねば気がすまない。

オレはエルトをみんなから一歩前に出し、キーボードを素早く叩き込んだ。

「ここの狩り場は、昨日の炎の祭壇の倍はあるでしょう？　いくらあんたでも全部のＭＯＢを狩りつくす事はできなはずだ。こっちが端っこで狩りをすれば、住み分けができるんじゃないですか？」

しばらく沈黙があった後。肉屋は再び口を開いた。

「駄目。ＭＯＢが足りない。お前達はよそで狩れ。ここは私が４時間前から使ってる。それでもここで狩りを続けるなら」

肉屋のセリフが終わると同時。エルトのＨＰゲージが赤く点滅した。

「ＰＫする。お前達全員」

エルトのＨＰは二桁になってしまっていた。肉屋の放った矢が深々とエルトの胸に突き刺さっている。エルトは荒い息を吐いて今に

も倒れそうな状態だ。ディスプレイに映る肉屋の身勝手な振る舞いに、オレの中で熱いモノが煮えたぎった。

『ふざけるなよ』。それは、誰もいない暗い部屋で呟いたリアルの自分の言葉。ぬるくなったコーヒーを飲み干し、キーボードに指を走らせる。

「エル君に何するの＞＜」

プンがオレの想像を裏切り、真っ先に肉屋に攻撃を仕掛ける為、動き出した。川を挟んで向かい合う形になっているわけだが、プンは川を越えるまでに無数の矢を体中に受け、まるでハリネズミのようになっている。普通なら即死レベルのダメージを受けているはずだが、持っていた回復薬類を全て使用してなんとか耐えているようだ。だが、もう持たないだろう。

「プン、やめろ！　お前が死ぬぞ！」

「大事な友達にこんな事されて、黙ってられないよ＞＜」

プンが川の中ほどで歩みを止めた。するとプンの体に光が集まり、それが全身を包み込んだ。そこに再び無数の矢がプンに襲い掛かる。だが、プンは倒れない。どうやら、防御力を極大化するスキル『ファイナルプロテクション』を使用したらしい。３０秒間の間、自分の防御力に＋３０００されるそのスキルのおかげで、プンは力尽きることなく向こう岸にたどり着いた。

プンはすぐさま肉屋の一人、豚肉５００gに斬りかかった。

プンの放った斬撃がエルフの女性を横一文字に切り裂き――牛肉

５００ｇが倒れた。

「あれ@@？」

プンの攻撃はまぎれもなく豚肉５００ｇを捉えていたのだが、直後に倒れたのは何故かその右の牛肉５００ｇであった。

「肉屋ＹＯＥＥＥＥＥＥ！　そしてＵＺＥＥＥＥＥＥ。正義の味方、みんなのアイドル。斬魔様参上～はい、拍手～ｗｗｗ」

漆黒の塊が牛肉５００ｇの後ろから現れる……それはＰＫ斬魔だった。

たぎる熱い思い

「ＰＫ。うざい」

倒れた牛肉５００ｇを見て豚肉５００ｇが発言する。すぐさま攻撃モーションに入り、斬魔に向けて二本の矢が放たれた。

「ＯＳＥＥＥ！　当たらないよ～んｗｗｗ」

だが、斬魔はそれを余裕で避けきってみせる。それにも構わず肉屋は再度矢を放つ。斬魔は遊んでいるのか、それをのらりくらりとかわし、ソーシャル『笑う』で小ばかにしたような低い笑い声を上げると、装備していた防具を脱ぎ、裸（裸体という意味ではなく、防具未装着をいう）になってわざと攻撃を受けてみせた。

逆上した肉屋は、今もなお裸で笑い続ける斬魔に向けて、スキル『ペネトレイトシュート』を豚肉５００ｇ、鶏肉５００ｇから同時に放つが、斬魔はそれを待っていたかのように忽然と姿を消し、鶏肉５００ｇの背後を取ると、デュアルスタッブで瞬殺した。

「クソ肉乙ｗｗｗ　全部まとめて合挽きミンチやなｗｗｗ」

残された豚肉５００ｇに斬魔が容赦なく罵声を浴びせる……肉屋に注意が向いている今、この隙を突くしかない。

「プン、こっちに戻って来い！　肉屋と斬魔が潰し合っている間に逃げるぞ。ケルさんも、いいですね？」

「あーー＞＜　ちょっとまってえ；；」

ケルから了解を取り、プンがリターンの適用範囲内に入ったのを確認して、リターンを発動させる。

リターンの発動まで5秒。4……3……しかし、普段の行いが悪いのか、こういう時に限って嫌なことが起きる。

突如、オレの目の前に出現したマンイーター。まずい。こいつはアクティブモンスターだ。プレイヤーが近くにいれば、向こうからやってきて攻撃を仕掛けてくる。

しかも、オレはさっき肉屋から受けた攻撃で瀕死の状態なのだ。一撃でもこいつの攻撃を受ければエルトは即戦闘不能となり、発動中のリターンは解除され、プンも、ケルも、ダンナも、ついでにヤマモトも斬魔にやられてしまう。

他の誰かがこいつを倒そうにも、離れたプンをリターンの範囲に入れる為、ケル達から遠ざかったのがまずかった。

――ダメだ。やられる。

マンイーターがオレの眼前に迫る。攻撃の間合いに入ってしまった。だが、まだリターンは発動しない。

その時。急に視界が白い物に遮られ、マンイーターの断末魔が聞こえた。

その白い物は、よく見ると長い銀髪で、フェイブの青年の後姿だった。巨大な剣を構え、青年は斬魔に向かって駆けて行く。

その姿を捉えてすぐ、リターンの詠唱が完了しロード画面に移行すると、ディスプレイは暗黒を映し出した。

「椛……？」

唯一の光源であったディスプレイの光すら失った完全な暗闇の中で、オレは一人そう呟くと、一人安堵した。

この数日で二度もあいつに助けられた。今の今まで……1年近くすれ違うことさえなかったのに……。

ふと、目の前に一筋の光が差した。それは何の比喩でもなく、単にロードが終わり、画面の読み込みが始まっただけだ。

気を取り直して、再び意識をゲームへと戻しディスプレイに視線を注ぐ。

ロードが終わるとディスプレイには、ミロンの村とプン達の姿が映しだされ、全員の無事が確認できた。

「エルくーん怖かったよー／（；ｏ；）／」

村の中心で、プンがオレの姿をみつけるとすぐに駆け寄ってきて、ソーシャルで抱きついてきた。

「全員無事みたいでよかった」

「あれって、斬魔よね？　肉屋をＰＫした後、誰かと戦ったみたいだけど、エルトくん誰か知ってる？」

ケルもあの瞬間を目撃したらしく、オレに意見を求めてきた。
「オレも見たのは一瞬だから、確証があるわけじゃないけど……椛だと思います」
「椛って……確かトーナメント一位で、元灰色の狼の？」
「詳しいですね、ケルさん」
そうだ。椛は元々灰色の狼に所属していて、ある時ギルドを抜けてフリーになった。どういう経緯でそうなったかは知らないが、今は一匹狼になってＰＫＫをしている。
「アタシも一度世話になった事、あるんだよね～。ダンナと召喚契約できたのも、あの人が手伝ってくれたお陰だし」
椛はＰＫＫ以外にもそんな事をしていたのか……。
「ねーエルくん。椛さんを助けに行かない？」
「はあ？　お前はアホか。椛が負けるわけがないだろう、行ったらただの足手まといだ」
プンが突然わけの解らないことを言い出したので、即否定してやった。
「でも、ＰＫの斬魔さんってＰＫギルドのマスターさんなんでしょ（？＿？）　今日も一人とは限らないんじゃない？」
意外にも、プンはオレの言葉に逆らってきた。だが……確かにそ

うだ。

斬魔はＰＫギルド『ヴァーミリオン』のギルドマスターである。前回の教訓から伏兵として仲間を回りに潜ませているかもしれない。多対一では、さすがの椛でも負けるかもしれない。

「ぼくちんもプンちゃんに賛成ですお。この前ぼくちんをバカにしたお礼もしてやりたいし、例え死んで経験値が減ったとしても、あいつに一撃入れば満足しちゃいます」

「アタシは元々椛の世話になってるからねー。やるっていうんならダンナが力を貸すよ？」

いや……状況がはっきりしていない以上ヘタに動くのは危険だ。けれど……気にはなる。

斬魔は短気で粘着質な奴だ。一度受けた屈辱は必ず返しに来る。どんな手を使ってでも。

その斬魔を先日から椛が追っていた……ならば……プンの言う事もあり得るかもしれない。

「わかった。けど、まずは状況を確認してからだ。オレが一人でさっきの場所に戻って状況を確認する。なにかあればすぐにチャットで知らせるし、危なくなったら即リターンして逃げる……いいか？」

全員がそれに賛成したのを確認し、テレポーターを使ってウェルド大森林へ一人向った。

周囲のアクティブモンスターに察知されないように注意を払いつ

つ、先ほど肉屋と斬魔がやりあっていた川まで戻ってくると、オレが見たのは森の奥へと消えていく斬魔の後姿だった。

まさか……椛は……？

周りには誰もいない。いや……倒れている三人のエルフに気が付いた。

肉屋なら……何か知っているかもしれない。

「何があった？　斬魔と戦ってたフェイブはどこへいった？」

素早くキーボードを叩き、肉屋から情報を聞きだす。

「やられた。急に動きが止まって、斬魔が一方的に一人で殴り続けてたら、やられてた」

「やられた？　ちょっと待って。『一人で殴り続けてたら』てことは斬魔一人ってこと？」

「読解力なさすぎ。斬魔はずっと一人だった。たぶん、回線が切れたか、ラグの間にボコられたんじゃないの」

素直に答えてくれるとは思わなかったが、一応聞きだす事はできた。どうやら相手は斬魔一人で、椛がＰＣの不調か何かで動きが止まった時を突かれ、やられてしまったようだ。

椛を……許せない。不意打ちでＰＫをするとは……この前の礼もある。せっかくレベルを上げたプンやヤマモトの経験値を奪って、その上にツバと罵声を浴びせた斬魔……。

椛は今どうしているだろうか？　ここに死体がないということは、すでに村に帰還してしまったか、そのままログアウトしてしまったのかもしれない。

このままではあいつがかわいそうだ。仇をとってやりたい。

あいつは、曲がったことが嫌いで正々堂々を好む奴だった。だから、この状況に憤っているに違いない。初心者の頃から見ていたから解る。……ＰＫＫになったのも、おそらくＰＫを減らして、少しでも他のプレイヤーが安全に狩りができるようにということだろう。

オレはすぐさまマップを開いた。斬魔が逃げていった方向を確認する。

プン、ヤマモト、ケル、そしてオレのレベルとスキルを全て再確認。

条件は整っている。

――やれる。

まったく。あれほど熱くなるなと自分に言い聞かせていたのに……これではヒーラー失格だ。

でも、今はそれでいい。１年振りだ、この感じは。

他人に対して熱くなったのは。

やってやるか。そのためにも、こいつの力が必要だ。

オレは、リザレクションを使用して肉屋を蘇生した。

蘇生された肉屋は状況を飲み込めないのだろう。少し間を空けてオレに問いかけた。

「何で蘇生した。頼んでない」

「斬魔が憎いか？」

「当然。３回殺したい」

「なら手を貸せ。その為にお前を蘇生したんだからな」

「何をするの？」

少し興奮していた自分を落ち着かせ、コーヒーを少し口に含む。キーボードの上の指を静かに早く動かし、オレの目的を肉屋に伝える。

「斬魔をＰＫＫする」

張り巡らされた罠

「斬魔をＰＫＫ？　バカじゃないの。レベル差がありすぎる、絶対に無理」

当然の答えである。しかし、策はある。その為にもこいつを口説き落とさないといけない。

「ちゃんと考えはある。それとも、お前はあいつに言われたことをもう忘れたのか？」

『クソ肉乙』。『合挽きミンチ』。その二つの単語が肉屋の頭の中で蘇ったのだろう。すぐに問い返してきた。

「何をすればいい？」

単純な奴で助かる。さっき受けたこいつの攻撃と身勝手な振る舞いは、心の奥そこで消化されずに燃え残っているが、この際だ。利用させてもらう。

「簡単なことだ。今すぐ斬魔を追ってくれ。そして、後ろから絶えず斬魔を弓で狙撃。当たらないだろうが、当てなくていい。斬魔を攻撃し続ける事に意味がある」

「当てなくていい？」

「そうだ。この森の奥からフィールドに出れるが、その奥にあるダンジョン。『魔竜の巣』に足が向くように仕向けてくれればいい、オレもしばらくしたらすぐに後を追う」

『魔竜の巣』はレベル７０代のソロ用狩り場である。しかし、ＭＯＢの経験値とドロップが釣り合わず、マズイ狩り場として有名な所だ。そこに斬魔を誘導する。

「斬魔がもしこっちに向ってきたら？」

「それはない」

「何でそういい切れる？」

「そういう予定になっているからだ。それとも、怖いか？　お前はあいつの言葉通りの奴なのか？」

「違う。わかった。やる。すぐにあいつを追って、３キャラで弓を連射する。それでいい？」

「それでいい。斬魔が魔竜の巣に入ったらお前の役目はそこまでだ。あとは遠くで観察するなり、ログアウトしてくれて構わない」

「わかった。行ってくる」

「いってらっしゃい」

我ながら苦笑してしまう。これだけ心のこもっていない言葉はないだろう。あいつにはせいぜい役に立ってもらわねばならない。

肉屋が斬魔の消えた森の奥へと入っていくのを見届けて、オレはパーティーチャットで斬魔討伐作戦の概要を皆に伝えた。

皆は最初少し驚いたが、納得してくれた。ここで誰かが反対すれば、この計画はおじゃんになり、追って行った肉屋は斬魔に再度ＰＫされてしまうだろう。

それはそれでいい。あいつへの恨みはそこで晴らせる。だが、今一番の優先は斬魔だ。

そのためにはあらゆる手段を使う。ＰＶＰは装備やレベルだけで勝敗が決まるわけじゃない。スキルの使い方や経験しだいでいくらでもひっくり返せる。

それを……やり始めて１年足らずのハナタレ小僧に教えてやる。

オレの指示通りに皆が動く。１年前のあの頃の感覚が蘇ってくる。……ギルドを率いて数々の敵と戦っていたあの頃を。

やがて準備が整い、あとはオレの指示を待つのみとなった。

これから少し、忙しくなる。まずは、第一段階だ。

「ＰＫ斬魔がウェルド大森林に出ました！　付近で狩りをしてる人は気をつけてください」

オレはシャウトでそう叫ぶ。

「エルトＵＺＥＥＥＥ！　次回はお前ＰＫなｗｗｗ」

律儀にシャウトでそう返してくる斬魔。バカな奴。これが終わりへのカウントダウンとも知らずに。

「ＰＫどこですか？　ＰＫＫ行きます」

斬魔のシャウトが終わってすぐ、ヴェル力という名前のキャラクターが、シャウトでオレに問いかけてきた。

「森を出てすぐの所です。今どこですか？」

オレもシャウトでそう返す。

「ミロンの村です。準備してすぐに向います」

「お願いします」

ヴェルカ……斬魔ならばこの名前を知らないはずがない。ＰＫギルドが存在するならば、それと対をなす、ＰＫＫギルドも存在する。

このヴェルカというのは、そのＰＫＫギルド『三散花（さざんか）』のギルドマスターなのだ。ヴァーミリオンと三散花は常に戦争をしている。

その三散花のリーダーがミロンにいる。これで斬魔はおいそれとミロンの村に帰還できなくなる。あとは、肉屋が斬魔を魔竜の巣へと誘導してくれるのを、後ろから見届ける作業に移行する。

村に帰還できない斬魔は、このまま魔竜の巣へと逃げるしかない。立ち止まって肉屋をＰＫしている間に、三散花が来るかもしれないリスクをわざわざ追ったりしないだろう。

ちなみに、ログアウトもできない。なぜなら、カオス・クロニクルの戦闘システムは、攻撃を受けてもよけても戦闘体勢に移行する。戦闘態勢中のキャラクターは、それが解除されるまでログアウトは

できない。

ひっきりなしに斬魔の背中目掛けて、肉屋の矢が襲い掛かる。どれも命中していない。だが、それでいい。斬魔は戦闘態勢に入っているはず。ログアウトを封じることが目的なのだ。斬魔は村に帰還することもできないし、その場でログアウトすることもできない……。

これで斬魔の退路は断たれた。向う先は魔竜の巣……そこが奴の墓場になる。

「調子はどうですか？」

ヴェル力がオレにウィスで話しかけてきた。

「もういいぞ、ヤマモト。すぐにそのキャラを削除してキャラクターチェンジだ」

「ぬを。了解であります、中尉！」

ちなみに、このヴェル力というのは、ヤマモトに作成させたダミーのキャラだ。そもそも今日ヴェルカはログインしていない。いたとしても、時間的に間に合わないだろうし、斬魔を狩る為とはいえ、こんな低レベルのプレイヤーに協力してくれないだろう。

だからヤマモトにダミーキャラを作成させ、芝居を打ってもらった。あと、キャラクターの名前は基本的に被ったら登録できないシステムになっている。だから名前のカをカタカナのカではなく、漢字の力（ちから）にしている。よく見なければ気付く人間はそうそういない。

単純な斬魔のことだ。まんまと引っ掛かってくれたようで、今もなお駆け足で魔竜の巣に向っている。

斬魔の姿が魔竜の巣の中に消えていくのを確認すると、次はプンの出番である。これが第二段階。

「プン。まだＨＰは持つか？」

「ちょっときついかも～@@」

「あとちょっとで斬魔がくる。それまで堪えてくれ」

「あい～～＞＜ゞ」

こちらも準備が要る。斬魔が魔竜の巣に入ったとはいえ、まだまだ予断を許さない。

魔竜の巣は巨大な洞窟である。中は入り組んでいて、多数のアクティブモンスターがいる。今のオレ達がここのＭＯＢの攻撃を受ければ即死亡してしまうだろう。

斬魔なら余裕と言うほどでは無いが、狩りはできる相手だ。ただし、一対一ならば。

オレの狙いはそこにある。肉屋は言った。『レベル差がありすぎる、絶対に無理』と。なら発想を変えよう。オレ達のレベルで戦うから無理なのだ。斬魔以上のレベルの相手をぶつけてやればいい……そう、ここにいるＭＯＢを使う。

ＭＰＫ。モンスタープレイヤーキル。とでもいうのか。これも大

抵はＰＫが使う手で、大量のＭＯＢを引き回して、同種類のＭＯＢと戦っているプレイヤーのそばに近寄る。

そこで、自分のターゲットを解除するスキルなり、リターンなどでそこからいなくなれば、ＭＯＢの敵対心は、その同種類のＭＯＢと戦っているプレイヤーに全ていく。

結果、ＰＫは自分の手を汚さずに相手をＰＫできるのだ。

目には目を歯には歯を。

ＰＫにはＭＰＫで応えよう。

だが、前述の通りオレ達のレベルでは、即死レベルのダメージを負ってしまう。そこでプンにファイナルプロテクションを使用させ、大量にＭＯＢを集めてもらっている。

とはいえ、それでも想像以上のダメージをもらっているようだ。すぐに逃げ回っているプンと合流して、ヒールライトを連発する。プンのＨＰバーが赤くなったり、白くなったりを目が回るくらい繰り返している。

危険な綱渡りだが、あとはこれを斬魔にプレゼントするだけでいい。

耐えろよ、プン。

しばらくＭＯＢと楽しいかけっこをしていると、斬魔がアクティブモンスターに引っ掛かり、しぶしぶ戦っている場面に出くわした。

――これで終わりだ。

「おいおいおいおいおいおいおい」

斬魔が明らかにうろたえている。

「斬魔、乙」

オレはそうタイピングして、すぐさまリターンを詠唱した。

「俺だけ死ぬかよ、お前らも一緒じゃボケｗｗｗ」

斬魔は、一瞬消えて……オレの背中にデュアルスタッブを叩き込んだ。幸運な事に不発だったが、斬魔の次の攻撃でエルトの詠唱はキャンセルされてしまった。

再使用するまでの時間は残されていない。ＭＯＢはすぐそこまで来ている。このままではオレ達も斬魔と心中だ……。

「ざまあｗｗｗ　仲良く一緒に逝きましょう♪」

――と、斬魔は考えているのだろう。

「エルくん＞＜　どうしよう、ＭＯＢがいっぱいきちゃったよ@@」

大丈夫。予定通りだ。

「逝くのはお前一人だ、斬魔」

そして、すぐさまチャットをパーティーチャットに切り替えて、

ケルに指示を出す。

「ケル、サモンメンバーを」

「あいよ～♪」

一瞬で画面が暗転し、画面の読み込みが始まると、目の前にはダークエルフの女性キャラクターがいた。オレとプンは、魔竜の巣から少し離れた所にケルによって転送されたのだ。

ケルのサモンメンバーがあれば、リターンを発動させる必要なかったかもしれない。しかし、念には念を入れておきたかった。

斬魔があの時点で逃げてしまわないとも限らない。だから、斬魔を煽ってオレのリターンを妨害させるように仕向けた。これで今頃斬魔は、ＭＯＢの餌食になっているはずだ。

ヘイトは、何もナイトの固有スキルだけではない。言葉による感情の誘発。それもヘイトだ。

「さて、皆お疲れさん。とりあえず、斬魔がどうなったか皆で確認にいくか」

オレとプン、ケルの3人は合流すると、斬魔の最後がどうなったかを確認するため、再び魔竜の巣に戻ろうとした。

すると突然目の前をすごい勢いで何かが迫ってきた。黒い塊のようなそれは、二振りの短剣を構えて黒い髪を振り乱し、こちらへと一直線に向ってくる。

まさか。

「残念無念〜みんなの斬魔様はふ・め・つ〜〜ｗｗｗ」

斬魔！？

何故……考える間もなく、オレは背後から光の塊に貫かれた。ダメージはさほどではないが、それでもエルトのＨＰが三分の一ほど削られた。

このスキルはライトブレッド……ヒーラー？

「戦禍、愛してるぅぅぅぅぅぅぅぅｗｗｗ　半分お前にやるわｗｗｗ　オレはあのヒーラーぶっころちゅ！」

「じゃあ僕はフェイブの女の子がいいな。レアじゃん、アレ。化石並みの価値だよ」

戦禍（せんか）。ヴァーミリオン所属のドワーフヒーラーだ。

仲間がいたのか……たぶん、あの戦禍がリターンを発動させて斬魔を救出したのだろう。

斬魔同様に黒いローブに身を包み、ドワ坊でありながらダークエルフのような印象の幼い少年……無邪気そうな笑顔を浮かべた幼く愛らしい顔が、斬魔以上の禍々しさを感じさせる。さながら、闇の司祭と言ったところか。

「おい、お前ｗｗｗ　ヴェルカいねーじゃねーかよ、人をだます悪い子はＰＫでちゅよー。バブウ」

斬魔のシャウト。今のセリフから察するに、戦渦あたりから聞いたのだろう。ミロンに危険がないことを知って帰還したのか。

斬魔と戦禍。その二人に挟まれ、逃げ場は無い。ここは、やはりリターンで逃げるしかない。

「斬魔。あいつリターンしようとしてるよ。止めたら僕の事もっと褒めてくれる？」

「褒めるＺＥＥＥＥ！　戦禍ＹＡＲＥＥＥ！」

「僕、頑張るね＾＾」

戦禍の足元に六芒星の魔方陣が発現し、エルトの頭上に×マークが浮かび上がる。

……やられた、サイレンスだ。沈黙状態になったことで、リターンが不発に終わり、その場に取り残されたオレ達と斬魔の距離がだんだんと縮まっていく。

今のオレは無能だ。何もできない。魔法の使えないヒーラーなんて、ただの荷物だ。

「斬魔～僕、やったよ＾＾ｖ　あとは斬魔が好きにやっちゃってよ。僕、斬魔がＰＫする所大好きなんだ」

戦禍は無邪気な幼い笑い声を振りまき、スリープを詠唱すると、プンとケルの動きを止める。

四肢をもがれた昆虫のように、オレ達は何もすることができなくなった。

――仕方がない。

できれば、これだけは使いたくなかった。

マウスのカーソルをリスタートボタンへと向わせる。

もう1年近く動かしていないが、やれるだろうか？

オレが長い間このカオス・クロニクルで一緒に生き続けたキャラクター。

椛の師匠で、灰色の狼初代ギルドマスター。

カイン。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3140z/

カオス・クロニクル

2012年1月3日22時51分発行